
アイカシア王国記

東海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイカシア王国記

【Nコード】

N9929Q

【作者名】

東海

【あらすじ】

病死し、異世界に転生した“俺”は有力貴族の三男として、特にやりたいこともなく日々を惰性に生きていた。が、偶然にもカカオを発見した時、世界を変える野望が生まれる。すべてはチヨコレートの為に、一人の少年とカカオが出会う時、物語は幕を開ける。

*現在リメイク中

用語集（前書き）

用語集です。初めての人は次からお読みください。

とりあえずできた分だけ。随時更新します。地図はまだできてないです。

用語集

国名

・アイカシア王国

大陸最西端にある国。伝統的にエルトリア王国、サラディール帝国と仲が悪く十数年前までは争いが絶えなかった。最近は小康状態。アイカシア王国に侵略するには天竜山脈を通らなければならないため、国境に軍が集中している。陸軍として三軍、近衛騎士団、アイカシア王国騎士団、国境防衛騎士団があり、その他に貴族の私兵が少なからずいる。また、アイカシア自体は海に面しているが地理的な事情で海軍はない。

気候は南部は温暖乾燥で、北部は冷涼で多雨。

・エルトリア王国

政教が一体化している、天竜山脈の東、ライン川の北に位置する国。オルレアン（後述）を通る陸の交易路で栄えている。

・サラディール帝国

覇権主義国。ライン川の南に位置する。三百年前は大陸のほぼすべてを支配する巨大帝国だった。天華国（後述）からマケドニア（後述）を経由する海の交易路を支配している。伝統的に海軍が強い。現皇帝はクーデターで帝位を奪いとった。

・オルレアン

エルトリア王国の東方に広がる広大な草原で遊牧している騎馬民族。オルレアン原産の竜馬は一日で四百キロメートル以上を駆け抜ける。強大な軍事力を持つ国。やはり覇権主義国だが……。

・マケドニア王国

オルレアンの南、サラディール王国の東に広がる大砂界を支配する国。広大な砂漠のどこかにあるオアシスが首都で、建国以来一度も首都に攻め込まれた事がない難攻不落の国。天文学が発達している。

・天華国

大陸の東方に位置する巨大国家。天子の下すべての人間が平等と言う社会階層。砂糖、香辛料の原産地で、他国に売りさばいては莫大な利益を上げている。

・アルバロン島

アイカシアの南方にあり未開の地。中央部には強力な魔物が棲息する森がある。金鉱の存在も確認されている他、西側で唯一カカオの栽培に適した地域。昔は罪人の流刑地だった。

都市名

・フルストトルク

アイカシアの首都。トルク湖の上に建てられた半径一キロの正円状の都市。街中に蜘蛛の巣状に水路が巡っていて、移動はゴンドラと徒歩で行われる。

・リランカ

アルベル家の本宅がある都市。栄えている。

地方名

・セイロン地方

アイカシア王国最南端の海岸沿いにある地方。乾燥温暖。アルバ

ロン島程ではないが魔物が出てくるので開拓が進んでいない。細々と葡萄やオリーブを栽培している。

・シヤンデ

アルベル辺境伯エルリックが現在開発を進めている地域。岩塩が取れる。

団体名

・アルベル家

アイカシア王国南部、サラディール帝国との国境周辺を治める辺境伯の家系。王女派筆頭。

・メデイル家

王都周辺を治める公爵家。王女派筆頭。

人物名

・ジュリア

アルベル家三男。転生者。チョコレートの開発に人生を賭ける。十歳頃迄は病弱で死にかけていたので、剣の腕は素人に毛が生えたレベル。魔術も治療系統以外はあまり才能がなかった。ただ、頭はかなりよく、七ヶ国語喋れる上に知識も豊富。

・エルリック

アルベル家長男。忙しい父の代わりに辺境伯を引き継いだ。腹黒い。

・父上

アイカシア王国騎士団総帥。子思い。

・マリア

ジュリアの母。

・兄上

アルベル家次男。騎士。強い。寡黙。

・姉上

ジュリアの三つ年上。騎士。美人。

・アリカ

アルベル家の従者の家系。ジュリアより二ヶ月誕生日が遅く、生まれる前からジュリアに使える事が決まっていた。金髪に紅い瞳。天才的な戦闘センスを持っている。

転生（前書き）

なんちゃって内政、戦記です。

細かい事を気にしない心の広い方は、どうぞ読んでやって下さい。

転生

転生。

大学生だった俺は風邪を酷く拗らせてしまい、一人暮らしだった事もあって、呆気なく死んでしまった。

そんな俺が自分は転生したのではないかと思いはじめたのは、二、三歳の事だったと思う。

初めはふわふわして暖かい、心地好いの良い場所は、もしかしたら天国なのかと感じていた。でも俺は自分が天国に行ける程善良な人間ではないと自覚していたし、そこで見る夢に毎回綺麗な女性が出てきて、母が子を慈しむように接してくれていたから、俺はこの女性の子供ではないか、ここは天国ではないところだとも思い始めていた。

繰り返し夢を見て、夢と現実が交じり合うような世界で、沢山の人に愛されながら俺は少しずつ思考できるようになった。それでも熱に浮かされたような感覚は消えなかったが。

いつしか女性が俺の事をジュリアと呼んでいる事、そしてそれが俺の名前だと言うことにも気づいた。

それは夢からの目覚めだった。

人間は名前を認識して初めて、自我を確立する。世界に色が着きはじめ、モノクロの世界が終焉を迎える。

そして俺が成長するにつれて、周囲の言葉が段々と理解できるようになり、女性 母の名前がマリアだとわかった。俺は沢山の人間に傳かれ、否応なしに自分が支配階級の人間に生まれたことを悟った。

俺には歳の離れた二人の兄と二つ程離れた姉が居るようだった。母は四人子供がいるとは思えないくらい綺麗だったが。

五歳ぐらいになると、熱に浮かされたような感覚も薄れ複雑な思

考にも耐えられるようになったが、この頃から体調を崩した。

二三四回、死にかけたが、十歳の誕生日を迎える頃には大分身体の調子が良くなり、普通に生活できるようになった。

意識があるときは常にベッドの上に居たので必然的に娯楽は限られ、この世界は中世レベル文化だった事もあり、俺はかなりの数の本を読んだ。印刷技術の発達していないので本は極めて高価だったが、家が貴族で金があり、両親は病弱な俺を哀れんでか、俺の希望にできるだけ応えてくれた。

驚いた事にこの世界には魔法があるようで、少なからず魔法に憧れがあった俺は魔法の習得に打ち込んだ。

そんな風に、幼少期を学問と魔術の鍛錬に総てを注ぎ込んだ俺は、前世の記憶もあり周りよりも相当大人びていたし、頭も良かった。実際前世の時よりも相当記憶力が良くなったし、本を読むために言葉を覚えたのが幸し、六、七ヶ国語習得していた。残念ながら魔術の才はそこまでなかったが。

だからといって前世の知識を利用して何かをなそうとかは思っただけなく、貴族の義務を果たしながら情性に、本に埋もれながら生きていこうと思っていた。

その時まで。

旅行

十二歳のある日。秋の頃。

「ジュリア様。エルリック様がお呼びです」

日課である剣術の鍛練が終わり、風呂で汗を流した後、メイド兼護衛であるアリカから伝言を承けた。

エルリックは今年二十四歳になるアイカシア王国辺境伯であり、俺の兄に当たる人物だ。

ここ最近は特に体調を崩す事はなく、何か問題を起こした記憶はない。

兄から呼び出される理由が想像できないが応じない訳には行かない。今は素直で聡明な子供として通っているのだ。

白を基調とした落ち着いたメイド服を着たアリカに礼を言うと、俺はエルリックが居る執務室に向かい、ドアをノックする。

「入りなさい」

耳に心地好く柔らかな声だが、言葉に強制力がある。貴族の威厳だろうか？

「失礼します」

落ち着いた雰囲気執務室はとても趣味がいい。高価な家具が完璧に調和し、誰が見ても品があると答えるだろう。その中に居るエルリックは俺の一挙一動を見つめていた。

この世界で生まれて十二年、仕込み込まれた儀礼でエルリックに挨拶し、用件を聞く。

俺の所作が終わると、エルリックの張り詰めた表情が柔和に変わる。どうやら合格のようだ。アルベル家の当主として敏腕を奮うエルリックはかなり礼儀作法にうるさい。まあ、貴族社会で生きるには隙を見せる訳にはいかないから当然の事だろう。時に礼節はあらゆる武器よりも鋭利になる。腹芸ができなければ貴族なんてやって

いけない。

「御用件をお伺いしても宜しいでしょうか」

「もう、楽にしてい」

エルリックは艶やかに微笑みながら、甘い声で囁く。

俺はいつみてもこうやって女を手玉にとっているのかと感慨深く思う、真似できそうにないが。母マリアの容貌を受け継いだエルリックは、身内鼻屑を抜かしても美しい。物語から抜け出した白馬に跨がる王子様と言っても過言ではない。

凜として涼やかな武人である父に似た、次兄や姉も見た目麗しいが、エルリックには一歩及ばないと思う。この人は自分の魅せ方を知っているのだ。

多少身体から力を抜くと、エルリックが話しを切り出してきた。

「ジュリアも知っていると思うけど、メディル公爵家御令嬢のカトレア様とアイリス様の十二歳の誕生日パーティーが十の月の八日に開かれる。本来なら当主である私が参加しなければ行けないんだけど、このところ仕事を立て込んでいてね、行けそうにない。何となく察しがついたと思うけど、私の代わりにパーティーに参加してほしいんだ。行ってくれるよね？」

終始にこやかなままエルリックは喋り続ける。一応お願いの形をとっているが、これはほぼ強制だろう。

「別に気負はなくていいよ、ジュリア。今回は誕生日パーティーを理由に、父上がジュリアに会いたがっているだけだから。それにパーティー自体も大した規模じゃない」

「……父上がですか？」

父上がね……。自分の事ながら意外に思う。

父上はアイカシア王国の要塞。軍事の要である三軍の一つ、アイカシア騎士団の総帥を勤めている。メディル公爵も同じく三軍の一つである近衛騎士団の総帥であり、二人は騎士学校から旧知の中だから、多少の無礼は許されと思うが……。

エルリックは訝しいんだ俺の視線に気づいたのか、少し苦笑しな

がら続ける。

「どうやらメディル公爵もジュリアに興味があるらしくてね。もし相性が良かったら話だけでも、御令嬢の婚約者にとお考えになられているみたいなんだよ」

婚約者が……。

その後エルリックと二、三言交わした結果、結局パーティーに参加することになり、王都フルストルクへの準備を進める事になった。

部屋に戻り就寝の準備をした後、一人で寝るには広すぎるベッドの上で今までを思い返す。

転生して思った事だが貴族と謂うのも意外に苦勞が多い。アルベル边境伯爵家三男に生まれた俺はかなり恵まれている方だが、貴族には義務が多く、上手く社交会で立ち回らなければ、いずれ没落してしまう。政略結婚なんて当たり前だろう。

まあ、それでもこの時代の平民と比べたら雲泥の差があるが。魔法と言う圧倒的な力を持つ貴族に代替の効く消耗品として扱われる平民よりはずっとましだ。

可哀相だとは思うが、特に行動しようとは思わない。自分の身が一番大事だ。下手な事はしたくない。

三男だし、適当に領地分けて貰って領地経営でもするか、軍に入って騎士になるかぐらいしか選択肢がないが、どちらにせよ安定して平均以上の生活をしたいたいものだな。

月明かりの下、俺は深い眠りに落ちた。

俺は今、エルリックとの会話から三日後、王都フルストルクに向かう為馬車に揺られていた。

一応街道は整備され、馬車も貴族御用達の最高級の物だが、この時代の技術の限界が結構揺れて尻にくる。

これが三週間続くのかと思うと暗鬱とした気持ちになる。

「ジュリア様。大丈夫ですか？」

何となく下を向いていると、隣で揺られていたアリカがルビーのように紅い瞳で覗き込んでくる。メイド服に帯剣していなければ良家の令嬢に見えるかも知れない。

「ああ、大丈夫だよ。心配しなくていい」

「そうですか？ あまり無理なさらないでくださいね」

そう言つて、セミロングの淡い金髪を揺らしながらアリカは元の姿勢に戻る。揺れに動じず、まったく疲れた様子を見せない。アリカもリランカの街から出るのは初めてのはずなんだが。鍛え方が違うのだろうか？

アリカは昔からアルベル家に仕える従者の家系で、母上が俺を身籠ったのに併せてアリカも身籠られた。現在アリカは俺より二ヶ月程後に生まれた十二歳。つまり俺に仕える為に生まれてきたと謂うことだ。アリカは数年前まではその事に悩む、というか自分の人生に、存在に価値はあるのかとか考えていたようだけど、今は上手く折り合いをつけているようだった。

アリカは幼少期からアルベル家の盾となり剣となるため、武術を含め色々とこつちが引くぐらいのスパルタ的教育を受けているから、俺はみたいに素人に毛が生えたレベルの剣術では話しにならないし、そこら辺の兵士より余裕で強いだろう。

「んっ？ 何か顔についてますか？」

俺がずっとアリカの顔を見詰めていたのに気づいたのか、話し掛けてくる。

「いや、アリカは疲れていないのかなと思って」

アリカの事を考えていたとは気恥ずかしくて言えないから、適当にごまかす。

「馬の方がかなり揺れますから平気ですよ」

「そうか。アリカも無理するなよ」

「ありがとうございます。ジュリア様」

俺も一応馬に乗れるんだけどなあ。とか思ったが特に何もせず、アリカとの会話はなくなった。

手持ち無沙汰になった俺は暇つぶしに持ってきた本を読みながら、次の街への到着を待つ。

途中に立ち寄った街で見たことの無い本はとりあえず買い占めながら、道中でそれを読みあさる。

この時代の本は非常に高価なのでアルベル家の財力がなければできない所業だ。多分、下手な貴族の財産じゃ買えない。

改めて自分の境遇が恵まれているなと思っっているうちに、王都フルストルクにたどり着いた。

正確には近くにたどり着いたと言っべきか。

フルストルクはアイカシア王国の北にあるトルク湖の上に建てられた計画都市だ。半径一キロメートルの円の中心に王宮があり、外に行くにつれて身分階層が低くなる。蜘蛛の巣状に張り巡らされた水路が王都での道となる。白で統一された建物と透き通る程澄んだ水が調和した美しい都市らしい。

湖畔にある小さな宿場街に馬車を留め、王都へ行くために客室のついたゴンドラに乗る。

俺とアリカ、護衛数人全員が乗り終わると水夫がゴンドラを漕ぎ出す。

客室　　と言ってもささやかな物だが　　の窓から湖を見ると、太陽の光が水面で反射し、澄んだ水の中に魚が数匹泳いでいる。

何とも言えないが感動する。直に魚を見たのは久しぶりだ。

「あっ！　ジュリア様、街が見えてきましたよ！」

隣に座るアリカが珍しく年相応にはしゃいでいる。

「おおお」

思わず出た感嘆の言葉。

白い街壁の上に覗ける、白亜の城。

天を貫くかのような巨大な城は、太陽に照らされて光り輝いている。城の周りには、四つの尖塔には、結界の魔術を発動させる陣が組まれており、ただ美しいだけでなく防衛力もある。

「凄いな！」

「凄いですねえ……」

眼下の光景に圧倒されながらも、ゴンドラは進み、旅の疲れを吹き飛ばす程に気分を高揚させる。

少し憂鬱だった旅も悪くなかったと思える程だった。

城壁で誰何された後、都市の中に入る。

城壁から横幅が二十メートル程の水路を通り、アルベル家が王都に所有している屋敷に向う途中、窓の外を眺めていると、人々が商う声が響く。

アルベル家の本宅がある、リランカの街も栄えていたがフルストトルク程ではなかった。

二十分程で屋敷付近にたどり着くと、石畳の地面に降りる。護衛を伴って貴族街を歩いていると、一際立派な建物が見えてくる。

「本宅に着きましたよ」

「そのようだな」

護衛が門を開けさせ敷地の中に入ると、二列に並んだ使用人達が一斉に頭を下げてくる。そしてその奥には四十代前半のロマンスグレーを体言したような紳士が立っていた。

半年ぶりに会うが父上だ。自らお出迎えとは予想していなかった。

「父上、お久しぶりです」

「良く来たな、ジュリア。初めての長旅で疲れているだろうから、とりあえず中に入りなさい」

「はい」

「ジュリア様。お部屋にご案内しますのでついてきてくださいませ」

一人の侍女に頭を下げられて、客室に案内されようとするとき、父上が不意に思い返したように、

「ああ、アリカ。」

俺の後ろをついてくるアリカを呼び止める。

「何でしょうか？ フラム様」

「サルミヤに、君の父に会いに行くといい。たぶんサルミヤは自ら会おうとはしないだろうからね」

父上はどこか不器用な友人を気にかけるように話す。

「じゃあ頼んだよ」

「はい。ありがとうございますフラム様」

どこか苦笑いを浮かべる父上と対称的に、まったく表情を変えないアリカ。そんなアリカを見ながら、近くて遠くにある、触ったら壊れてしまいそうな硝子細工に思いを馳せる。

「では、案内します」

仕切り直すように侍女が言葉を発し、屋敷の中に入る。

大理石のエントランスホールの左右にある階段を昇り、扉が並んだ廊下を歩く。その中の一つの前で止まり、部屋の中に入る。

そして、夕餉の時間まで休む事にした。

完全に日が沈んだ後、侍女が食事の用意ができたと喚びにきた。

普段ならアリカは食事中も側に控えるのだが、今は父親に会いに行くらしく、苦虫を潰したような表情で言っていた。

侍女に連れられて食事をしに向かうと、すでに父上と母上、それにアイカシア騎士団に所属している兄上と、王都の騎士学校に通っている姉上が、つまり辺境伯領に居るエルリック兄上以外はこの場に居るようだった。

「遅れて申し訳ございません」

詫びを入れると、

「気にするな、早く席に座りなさい」

と父上が。

「そうよ、食事が冷めてしまっわ。ジュリア」

母上が言うので、一つだけ空いている席に座ると、

「久しぶりね。元気にしてた？」

腰まで伸びた金髪をポニーテールにし、切れ長の蒼い瞳が凜々しい姉上が話し掛けてきた。

「はい。最近はやど体調を崩さなくなりました。姉上もお元気そうでなによりです」

ちなみにアルベル家は母上と俺以外は皆金髪碧眼である。母上は長い黒髪のおっとりした人でまだ三十代だ。

食前のお祈りをした後、食事を始める。

「それにしてもしばらく見ない間に背が伸びたのね。最後に会ったのはいつだったかしら？」

「姉上が騎士学校に通い始めてからはお会いしていませんから、三年ぶりですか」

ステーキを切り分けながら、姉上に応える。

「結構会ってなかったのね。ここにはどのくらい滞在する予定なの？」

「四日後に開かれるメディル公爵家御令嬢の誕生パーティーに出席するまでは居ますから、一週間ぐらいでしょうか」

ステーキのかけらを口に運ぶと、塩しかかけられていない、良く言えば素材を活かした味がする。アイカシア王国は地理的な事情で香辛料が非常に手に入りにくい。王族でも特別な日にしか食べる事ができない程高価なのだ。

「もつと滞在すればいいじゃない」

「冬が来る前には帰りたいので……」

「久しぶりに会うのに薄情なのね。お姉さんとても悲しいわ」

明るい表情から一転悲しそうな表情をする姉上。姉上とそんなに深い付き合いではない男なら、姉上の憂いを帯びた表情に慌てふためくのだろうけど、わざとだとは判っているからどうという事はない。

ただ、付き合いあってあげないと拗ねるけど、昔散々遊ばれたので付き合わない。

「姉上はそんなに外泊許可がとれないのではないのですか？」

騎士学校は寄宿制の学校なので、簡単には外泊許可が取れない。

「確かにそうだけど……。昔は姉上、姉上って可愛かったのに。ねえ？」

「記憶を捏造しないでください姉上」

その後、久しぶりの一家団欒を楽しみながら食事を終える。

デザートとして果物を食べながらカードゲームに興じていると、父上が思い出したように執事を呼びつける。

「例の物を持ってきなさい」

「承知いたしました」

一礼して部屋から出ていく執事を見て、姉上は気になったのか、父上に話し掛ける。

「お父様、例の物とは何ですか？」

「臍肩にしている商人が珍しい物を持ってきてね、何でも体に良いものらしくてねジュリアに食べさせようと思ったんだよ」

地球で言う、コントラクトブリッジをしながら待っていると、執事と何故かアリカもついてきた。手には結構大きな卵型の果実を持っていた。

「用事は済んだのか？」

「はい。ジュリア様が得体の知れない物を食べるという事なので毒味に」

どうしてアリカが居るのだろうかという疑問を察したのか、アリカは疑問に答える。

「これは何ですかお父様？」

「ああこれはだな、何でもアルバロン島で取れる果実でな、カカコの実というらしい」

使用人に果実を切らせると、中には二十数個の種状の物が。

「これ、食べれるの？」

「この種を食べるらしいが……」

父上と姉上の会話を尻目に、俺は内心とても驚いていた。これ、カカオじゃないか？

情報が少なかったが、俺は確信を持っていた。なぜなら前世で特に趣味や好きな物がなかった俺だったが、チョコレートだけは別だった。大抵のチョコレート菓子は作れるし、チョコレートにだけはうるさいという自覚がある。言うなれば生き別れの双子に会ったようなものだ。見間違えるはずがない。

運命の出会いに感動をしていると、アリカがカカオを実を食べたらしく、顔をしかめている。当然だ、カカオはそのまま食べる訳じゃないからな。

姉上はアリカの反応を見て、興味を持ったらしく一口口に入れる。

「……………」

無言だった。

「食べれる味ではなさそうですね父上。気持ちだけ貰っておきます。後この実、貰ってもいいですか？」

父上は悲しそうな顔をしていたが、今はどうでもいい。

俺は今、自分が転生した理由を確信したのだ。頭の中でチョコレートトの生産計画を考える。

アリカが珍しそうな顔をしていたのには気づかなかった。

始動

運命の出会いからはや一日。

チヨコレートを世界に普及させるべく、王立図書館に情報を求めやってきた。今日もアリカは父親に会いに行く、というかしごかれに行くのだろう。物凄く嫌そうな顔をしていた。

図書館の利用には本来は面倒な手続きをしなければいけないのだが、父上におねだりしたから問題ない。こういう時に親が権力者だと便利だ。

司書にアルバロン島関係の本を探して貰うが、全部で五冊しかなかった。アルバロン島は謎が多い島なのだ。

この辺りでこの世界の地理をおさらいしておく。

まず、西方三国。楕円型の大陸の真ん中を天竜山脈が縦に貫く。その左側がアイカシア王国である。次に右側を南北に隔てる、川幅二十キロ以上のライン河の北がエルトリア王国、南側がサラディール帝国となる。

次に草原の国オルレアンがエルトリア王国の東方に、砂漠の国マケドニアがサラディール帝国の東方、オルレアンの南方に位置している。

更に東方には天華国という、香辛料、砂糖を独占している国がある。

陸の交易路をオルレアン、エルトリアが抑え、海の交易路をマケドニア、サラディールが抑えているため、エルトリア、サラディールと中の悪いアイカシアには、ただでさえ高い香辛料、砂糖がもっと高くなるという事態が起きている。

最後にアルバロン島。アイカシアの南方に位置しどの国にも属さない島。天竜山脈で一部接しており、半島と呼ぶべきかも知れない

が、実際には陸路で行くことはかなり厳しいので、島と呼ばれている。

最も謎に包まれた島であり、わかっていることは、強力な魔獣がいる未開の地であり、海の交易路を荒らす海賊の根城であること。そしてカカオが自生する場所であるということだ。

地理についてはこれで終わりにし、次にチョコレートを作り出すために必要な事を考える。

まずは場所だろう。カカオの栽培にはアイカシア王国は向いていない。南方のアルベル辺境伯領付近は温暖なんだが、ほとんど雨が降らず乾燥しているため、カカオには向いていないからだ。

他国も無理だろうから、やはりアルバロン島を開拓するしかカカオを生産できないだろう。

が、それが一番難しい。

五冊の内一冊には、過去のアイカシア王が大規模な探索、開拓隊を編成したという記録が残っている。

その結果は二千程いた開拓隊は、最終的に三人まで減り失敗。

三人が持ち帰った情報には金鉱があることが示されていたが、その王の後、開拓隊が組織されたという記録はない。

投資に対して割が合わない判断したのだろう。先見の目がなかったと言わざるを得ない。

だが俺にとつて幸いな事に、小学生の落書きレベルだがアルバロン島の地図が書かれていた。

アルバロン島の北には人が住むのに適した平地があるが、中央部に強力な魔獣が住む森があり、食料を求めて襲ってくるらしい。北東には天竜山脈を源流とするだろう川が流れているようだ。金鉱もここで発見されている。

書かれているのはこれだけだ。

やっぱり情報が少な過ぎる。

開拓に必要な人材と物資を揃えるのと平行して情報を集める必要があるか……。

「隣に座つても宜しいかしら？」

いつから居たのだろうか？ 俺よりも少し年上の利発そうな銀髪の少女が声をかけてきた。

「構いませんけど」

初対面だが、誰だかはわかる。

銀髪と年齢、そしてこの場に居るということから推測すると、ほぼ間違いなくシャルロット王女殿下だろう。記憶が確かなら現在十三歳だ。

「はじめまして私はジュリア・アルベルと申します。貴方様はシャルロット殿下でございましょうか？」

椅子から立ち上がり、自己紹介をすると、

「ええ、私はシャルロット・アイカシアよ。宜しくお願いするわ」シャルロット王女も応える。砕けた言い方だがどこか気品のある、人を従わせる力のある声だ。

ひざまずき王族に対する礼をした後、疑問に思っている事を尋ねる。

「シャルロット殿下、何か御用でしょうか？」

「いえ、特に用がある訳ではないのだけど、貴方が珍しい本を読んでいるから、少し興味が湧いたのよ。アルバロン島の事を調べてる様だしね」

シャルロット殿下はそう言うと、テーブルに置いてある本にちらりと視線を向ける。

「ああ、この本ですか？ 先日父に興味深い物を頂いて、何でもアルバロン島を原産とする果実、カカコについて調べていたのですよ」
「あら、そんなのね」

シャルロット殿下と他愛のない世間話を続けていると、唐突に、脈絡なくシャルロット殿下が話しを切り出す。

「貴方はこの星が丸いと思う？ 私はそう思うわ。正直に答えなさい」

射ぬくような視線は嘘を許さなそうだが、本当に突然過ぎる。た

ぶん今までの会話は前置きでこれが本題なのだろう。さつきから探るような雰囲気はあったし。

しかし、頭が良さそうだとは思っていたがこれほどは。この時代の常識は世界の果てには大きな滝があるぐらいの認識でしかない。……失礼ですが、殿下がそう考える根拠を聞いても宜しいでしょうか？」

シャルロット殿下の瞳を覗き込む。

「この前月蝕が起きたでしょう。その月の影は丸く欠けていたわ。それに月は丸いし……」

しりすばみになるシャルロット殿下。おそらく直感的に地球は丸いのではないかと疑っているのだろう。

「根拠としては弱いと思いますけど、有り得ない話しではないと思います」

返答に驚いた表情をするシャルロット殿下。

「貴方は否定しないのね」

「否定して欲しかったのですか？」

「そういう訳じゃないわ。ただ……驚いたのよ。こんな事を言ったら気がおかしいと思われると思って」

「では、何故私に？」

「それは……、貴方の父が貴方の事をとても頭が良いと言っていたから。同年代の子が同じような事を考えるのか気になったのよ」

普通の子供はそんなこと考えないだろうな。

シャルロット殿下はどうやら自分の考えている事が否定されなかった事が嬉しいらしく、アルバロン島についての自身の会見について嬉々として語ってくる。

「だからね、ここここを川で繋いで一つの大きな運河にするのと、アイカシアもサラディールを経由しない貿易ができるようになるでしょ」

シャルロット殿下の政策は現実可能かを考えなければ、非常に素晴らしいと思われるものだった。

その後もシャルロット殿下と話しをしていると、いつの間にか夕餉の時間が近づいていた。

「では、シャルロット殿下の力になる事を約束しましょう」
話しをしている内にシャルロット殿下に認められたようで、アルバロン島の開拓の際にはいろいろと援助して貰う事になった。

今日はアルバロン島についてわかった事は少なかったが、シャルロット殿下と言う強力な協力者を得る事ができた充実した日となった。

メイド少女の日記（前書き）

誤字脱字はそのうち直したいと思います。
次らへんまでプロローグです。

メイド少女の日記

私の名前はアリカ、アリカ・シュルバだ。アルベル家三男ジュリア様の護衛兼女官をしている。

シュルバ家の長女として生まれた私の記憶がすっかりとし始めたのは、五歳頃だったと思う。その頃から、私は毎日が動けなくなるまで剣をふらされていた。今でこそ子供騙しのようなレベルだが、当時の私にとっては毎日が地獄だった。

その頃の私は地獄を見せる祖父との訓練が終わった後、毎日のように母に泣きついていて。そして母は泣きついてくる私を見て、いつも微笑みながらこう語りかけるのだ。

アリカ。貴方はジュリア様に仕えるのだからもっとしっかしないとだめよ と。

生まれる前からジュリア様に仕える事が決まっていた私は、当時から母と祖父にジュリア様に仕える事を言い聞かせながら育っていた。

その頃の私は三人の兄と同じように何の疑問もなく、ジュリア様に仕えるようになると思っていたし、まだ見ぬジュリア様がどんな人なのか期待と不安でいっぱいだった。

訓練がきつい事以外は充実した日々で、話しに聞くジュリア様はとても病弱で、私がジュリア様を護ってあげようと子供心で思っていた。そして何より私が将来の抱負を語ると母がとても嬉しそうに微笑み、そのことが私を幸せにするのだった。

だが、そんな日々も私が七歳の時に終わりを告げる。ある寒い冬の日の事だ。その日、私は初めて体験する、身を締め付けるような寒さに身震いをしていつもより早く起きた。いつもように窓を開けると目に飛び込んだきたのは一面の銀世界。温暖なアルベル辺境伯領では数十年に一度しか起こらない大雪。すべてが美しく見えて、尊く思えた。

この景色を母にも見せたくて、私は日が昇る前に母の寝室に忍び込んだ。きつと母も驚くはずだ、と。

「お母様、起きてください。アリ力です。起きてください、お母様あ？」

体を揺すってもびくりともしない母。いつも太陽みたいに温かいその手は、酷く冷たくて、まるで窓の外の雪の様に白く、血の気が失せていた。

初め目の前の光景が信じられなかった。

「お母様……？　ねえ、お母様！？」

その後の事は良く覚えていない。ただ、後から聞いた話しでは、母の亡骸にしがみつき泣き叫んでいたらしい。

そして私はこの日、雪が嫌いになった。

母が死んだからと言って私の生活は悲しい程に変わらなかった。少なくとも表面上は。

それどころか、初めから母の死など無かったかのように振る舞われた。母が死んだあの日、アルベル家でもジュリア様が死にかけたからだ。幸い　私にとつてはどうでもよかったが　にもジュリア様は持ち直した。そのことでアルベル家中が忙しかったのだ。

母の葬儀は少人数で行われた。そして父は葬儀に参加しなかった。

だから今でも私は父の事を許していないし、認めていない。

葬儀の次の日から訓練は行われた。祖父も所詮同じ穴の貉か。私は諦観に似た怒りを感じた。訓練は相変わらず地獄のようだったが、祖父に対しての怒りがそれよりも勝っていたから乗り切れた。

そして母の死から一ヶ月たった頃、私は初めてジュリア様と対面を迎えた。正直な所私はジュリア様が嫌いだ。いや嫌いになりたかったと言った方が正確だろう。同じ冬の日、死んだ母と生き残ったジュリア様。そして母よりもジュリア様を優先した父に祖父。その他にも色々あったが、この二つが大きな要因だった。

だから私は、ジュリア様を嫌いになる理由を探していた。そうした方が楽になれるから。

でも、私が部屋に入って初めて目にしたのは黒い真珠のような髪と蒼く深い海の色をした瞳。日に焼けていない肌は病的に白く、細面の顔は繊細で作り物の人形のようなだった。ベッドの上だけが切り取られたように静謐な空気を纏って、病床のジュリア様は半身を起こしながら私に優しく微笑むのだ。

「こんにちは、君がアリカちゃん？」

今になって思えば一目惚れだったのかも知れない。その時一瞬だけ母の事を忘れてジュリア様に見とれてしまった。

私はそんな私を自己嫌悪をすることから、主従関係が始まった。

一日の半分を訓練に、半分をジュリア様の傍に仕えながら、ひたすら徹底してジュリア様を観察する。そんな日々を過ごしながら私は精神を擦り減らしていった。

最初、ジュリア様の性格はとても穏やかだと判断したが、観察を続けていく内に穏やかなのではなくただ単純にめんどくさがりなのではないかと思うようになっていった。

ある日、他の使用人が誤ってジュリア様の顔に傷をつけた事があった。本来なら貴族の顔に怪我をさせたとなれば良くて解雇、最悪処刑も有り得るのだが、ジュリア様は少しの減俸を課したただけだった。使用人はジュリア様は慈悲深いお方だと思っていたようだけど、

ジュリア様は下手に使用人を罰して周りが煩わしくなるのを避けて、本の海に溺れたいと考えているように、私には思えた。

このお方は退屈なんだろう。頭が良すぎてすべての結果が最初からわかっている。本も退屈凌ぎに読んでるだけかも知れない。時偶見せる、面白い物を見つけた子供のように爛々と輝く瞳は、普段はとても静で揺れる事がなかった。

そんな人生に達観したようなジュリア様よりも母が生きてくれていたらと思わない事もなかったが、さすがに言い掛かりの逆恨みだと理解していたので、積極的に嫌悪することはできなかつた。逆を言えばそのことぐらいしか嫌う要素がなかつたという事だ。

兎角、私の生活は緩やかに過ぎていく。必要最低限の会話しかない毎日。やり場のない怒りをぶちまけるように訓練を行った私は、元々の魔術さいのうと剣術の素養もあつてか、急速に強くなつた。

そして十歳の頃、初めて祖父に試合で勝利した。シュルバ家の伝統としてある一定の基準よりも強くなると行われる通過儀礼がある。それは死刑囚の処刑だ。主を護るためには人殺しを躊躇つてはいけない場面は絶対にあるし、元々シュルバ家は従騎士の家系だ。戦場で迷つたら死ぬ。この伝統について特に思うことはないが、……ただ、少しだけ恐かつた。大体は十二歳前後に行われるらしいが、私は通常よりも優秀だつた。

ついに訪れた処刑の日は私の心を写したように曇天だつた。アルベル家の地下にある処刑兼拷問部屋。薄暗い部屋には燭台が一つだけ。僅かに灯る蠟燭が囚人の影を揺らす。十字架に磔けられた囚人は猿ぐつわと目隠しをされていて、身動きがまったくできないようになつていた。罪状はジュリア様暗殺未遂。ジュリア様は王女殿下と、年齢と身分が釣り合う数少ないお方だ。おそらくあわよくばジュリア様の排除を狙つた政敵。相手は限られてくるが、の捨駒、居なくなつても誰も悲しまない人間。

一歩一歩囚人の前に進んで行き、ついに間合いに捕える。すつと息を吐き呼吸を落ち着ける。じんわりと湿つた空気が体に纏わり付

き、首筋に玉の汗が流れる。

落ち着け。いつも通りに

日頃の訓練通りに振り抜かれた曲刀は、まっすぐ首に向かい、肉を裂き、骨を断ち、命を屠った。

その日の午後、いつものように私はジュリア様の傍に控える。囚人を処刑しても顔色一つ変えない私を見て祖父は珍しく褒めていたけど、内心吐きたくて堪らなかつた。ただ、吐くものがなかつただけだ。普段の態度の賜物か特に私は変な態度はとっていないかつたと思う。普段通りにジュリア様は本を読み、魔術の鍛練をなさる。私はその傍に仕える。いつも通りだ。

当然の如く、食欲はなかつた。普段よりかなり早く早く寝台に入った。寝てしまいたかつた。忘れてしまいたかつた、肉を切り裂く感覚を。苦しげな断末魔を。そうでないとい心が決壊してしまいそうで。

「お母様……」

無意識の内に出た言葉に自分が参っていた事に気づく。

「アリカ？ 部屋に居る？」

不意に聞き慣れた声が響く。今は逢いたくなかつた。

「……………」

「……入るよ」

部屋に入ってきたジュリア様は珍しい表情をしていた。ただ、仕えているだけではわからない極僅かな瞳の色の違い。二年間ジュリア様を観察し続けた私だから読み取る事ができた感情。

「……大丈夫だから」

その言葉と伴ってジュリア様は私の手を握る。

「大丈夫だから」

握られた手は温かくて、私は体面もなく泣いてしまった。

そこから会話は無かつた。何も言わなくても思いは伝わったから。

私がジュリア様を見ていたように、ジュリア様も私を見ていたのだらう。

一晩中握られたその手に安心しながら、私は今まで溜め込んでいたものを洗い流した。

その日から何かが劇的に変わった訳ではないけど、少しだけ距離が近づいた。

そして、運命が廻り始めた日。カカコの実を見て瞳が輝いた日。

この世に退屈した主が見た世界が実現するまで、私は主に仕え続けるだらう。

夜会（前書き）

細かい敬語は気にしないでください。お願いします。

夜会

図書館ではあれ以上情報は見つからないと判断したので、翌日からは王都の観光をし始めていた。

ぶつちやけ暇なのだ。娯楽の少ないこの世界では読書は貴重な暇潰しの手段だが、王立図書館にある本は大体が読んだことが物だった。もつとも読書を暇潰しだと考えているのは俺だけだろう。この世界全体で見ても識字率はかなり低い。農民、平民では読み書きできる人間はかなり少ないし、貴族でも文盲が割といる。読み書きができると言っただけで就職は有利になるし、平民でも下級官僚ぐらいなら成れる。

だったら勉強すればいいじゃないかと疑問に思うかも知れないが、勉強するのが大変なのだ。まず第一に紙がかなり高いこと、製紙技術がかなり遅れているアイカシアでは羊皮紙と、東から入ってくる和紙のような物しかなく、羊皮紙は文字の練習に使うには躊躇われる値段だし、和紙に至っては薄紙の束でも家が一軒立つ価格だ。

第二に時間がないと言うことも挙げられる。この世界では十四歳が成人だが、八歳を過ぎたころから親の仕事を手伝い始めるのだ。

話しが反れたが結局、この時代に読み書きできると言うことは、家に余裕があるか、立身出世を目指している人物に限られる。故に純粋な娯楽小説はかなり少ないし、質も良くない。

でも人間本当に暇だと学問に打ち込んでしまうものだ。結果として俺は特に何かを目指していた訳ではないが、大陸中から本を買いあさり日々本に埋もれて過ごしていた。たぶんアルベル家じゃ無かったら破産する額だ。まったく父上様様である。

閑話休題。

と言う訳で読む本があまり無く、せつかく王都に来ているので觀光をしている。ちなみに家族は皆多忙なので一昨日のように家族が揃い事は滅多にない。

水上をアリ力を含め数人の護衛と共にゴンドラで移動し、向かうのは骨董市だ。

明後日のパーティーの贈り物は既に父上が用意している様なので特にどうこうする訳ではないが、個人的に贈りたい物が見つければ買ってもいいとの事だ。そのための軍資金も結構な額を貰っている。骨董市は王都の南西にあるそれなりに大きい広場で開かれており、全国から集められた珍しい物で溢れているらしい。

区画に着くと、思わず酔いそうになるくらいの人混みが。

「賑わってるな」

「ええ、王都でも一二を争う人気のある市ですから」

口から出た言葉に、生まれも育ちも王都らしい付き人の一人が嬉しそうに答える。何か犬みたいな奴だ。

犬に導かれて露店を巡る。俺達が近づく度に半径四メートル程が空白になるが、廻り易いので気にしない事にする。

大体が明らかに贗作な物や、興味が惹かれない物だったので、正直期待外れだったかなと思ひ始めた時、明らかに気色の違う雰囲気が見え、

目深に被ったフードを着た店主は浅黒い肌をしていた。

俺達はその店の前に立つと、店主は顔を上げ琥珀色の瞳で俺を見据え、

「いらっしやい」

と、異国的な訛りのある声で挨拶する。おそらくはマケドニアの人間だろう。

並べられた品物はどれも珍しい天華国の物だった。実は凄い優秀何だろうか？

疑問に思つて尋ねると、何でも天華国とアイカシアを往復しながら行商をしているようだ。

店主に一品一品丁寧に紹介してもらつてみると、アリの視線が一点に集中している。魅入られているようだ。

アリの視線の先に在るものを見ると、それは刃渡りが一メートル以上ある、美しい輝きを放つ反つた刀で、巨大な包丁のようだ。

店主にその説明を求めると、天華国で仕入れた品で、天華国より更に東の国の物らしい。値段を聞くと高かつたが買えくはなかつたので買うことに。

「じゃあ、これを。後、これとこれも頼む」

「合計金貨百五十枚になります」

付き人の一人に代金を払わせると、店主はほくほく顔になる。包丁は重過ぎて売れずに困つていたらしい。おまけに硝子の玉を貰つた。

犬がとても物欲しそうな目で見ていたので硝子の玉はやる事に。尻尾を振りながら喜び、家宝にするとまで言われた。ちよつと引く。アリの顔を近くに呼び寄せると期待した顔をする。

「アリにはいつも世話になつてるからな」

「ありがとうございます。ジュリア様」

包丁を渡すとアリは軽々と受け取り、殆ど見ることでできない年相応のわくわくした、遠足前の子供の様な顔をする。ちなみにアリの力は高度な技術である身体強化が使えるので重い包丁が持てるのだった。

そして、アリの吐息が感じられる程に近づき、白い華が描かれた紅く独特な光沢を放つ髪飾り　簪でアリの淡い金髪を飾り付ける。

「後、これも」

「あつ……ありがとうございます……」

僅かに頬を染めるアリの嬉しくなる。昔だったら絶対に受け取らなかつただらうな。だんだんとアリとの関係が良くなつてい

から嬉しい。

その後、機嫌の良い犬に連れられてぶらぶらしたがめばしい物はなかった。

時間は流れて翌日の夕刻。空が茜色に焼けた頃。

貴族街の中でも一際立派な屋敷の中に夜会が始まる。本来ならもう少し遅い時間に始まるのだが、名目は誕生パーティーなので仕方ない。勿論それも理由の一つではあるのだが、もつと政治的な理由がある。一言で言えば派閥をより強固にするための会合だ。

多少この国の政治に明るい者ならわかる事だが、アイカシアは二つ　正確に言えば三つ　の勢力に分裂している。まあこれは大國になればある程度は仕方ない事だ。

一つはメデイル公爵家、アルベル辺境伯家を中心としたシャルロツテ王女を次期国王に推す王女派。

もう一つは現王妃と宰相を中心に、齡三歳のアストリア王子を次期国王に推す王子派。現王妃はシャルロツテ王女の継母に当たる人物で、王に毒を盛つたと噂され、宮中の権力を掌握している。また、王子も床に臥している王との子でなく宰相との子だとされているが、これは噂の域をでない。後一つはどちらにもまだついていない日和見派だ。

王妃と宰相の仲がどうであれ、実際問題この政争に敗れる訳にはいかず、もし、敗れてしまえばいずれ家は没落してしまうだろう。

だから政争に敗れないように、大人の利害関係だけでなく、派閥の未来の担い手の関係を構築するためにも今夜のパーティーは利用されていると言うことだ。

つまり俺は本当のところは兄上の名代として夜会に参加することよりも、公爵家の長男であるアルフレッド様を中心とした子供達の会合で良好な関係を気づく事が求められていたのだった。ちなみに

三男である俺が選ばれたのも他の兄弟が忙しい事と、一番この会合に適した年齢だからだろう。

夜会は通常爵位の低い人間から入場するので、この会合で公爵家の次に身分の高いアルベル家はしばらくしてから入場することになるから、現在は待合室で時間を待っている。

「ジュリア。夜会は初めてだろうから落ち着いて臨みなさい。」
紳士服を着た父上に声をかけられる。

「はい。父上」

「ジュリアなら大丈夫よ。普段通りに振る舞いなさい」

黒いドレスを着た母上はとも四十近くには見えず、豊かな黒髪が印象的で若々しい。

「そういえばジュリア、何か贈り物は見つかったかい？」

「ええ、昨日の市で天華国の興味深い物を見つけました」

「そうかそれは良かった。喜んでもらえるといいな」

父上は父上でアルベル家からメディル家に祝いの品を贈っているので、俺の贈り物が気に入られようと入れまいがあまり関係ないけれど折角買った物だから気に入ってもらえると嬉しいものだ。

父上との会話の内に時間がきたらしく、公爵家の使用人が呼びびきた。

使用人に案内され、会場の中に入ると既に大勢の人間が。俺と同じくらいの年齢の子どもも結構な数がいる。

俺達が入場したのを確認して、メディル公爵が壇上に現れる。

「本日は娘の為に越しいただき感謝す

る。挨拶はこれぐらいして、今日と言う日を楽しんでくれ。乾杯！」

メディル公爵の口上が終わると、会場が賑やかになる。

最初に公爵に挨拶に行く。公爵夫妻の隣にはカトレア嬢とアイリス嬢、それとアルフレッド様と思われる人物が居る。

「公爵閣下、ご機嫌麗しゅうございます。私はアルベル辺境伯エリックの名代のジュリアと申します。本日はお招きいただき誠にありがとうございます」

「こちらこそ、わざわざ遠路遙々娘の為に訪れて下さり感謝する。アルフレッド、カトレア、アイリス。お前達もジュリア殿に挨拶しなさい」

メディル公爵に促され、俺より少し年上の貴公子然とした少年が前にでる。

「私はアルフレッドだ。宜しく頼む」

差し出された手を握り返し、握手を交わす。

言葉に力強さを感じる。生まれもって人の上に立つ資質とはこういう物だろう。

「私はカトレアと申しますの。宜しくお願ひしますわ」

「私はアイリスと申します」

深紅のドレスを着たカトレア嬢は全体的に高飛車な印象を感じ、実年齢よりも高めに大人びて見えた。対するアイリス嬢はカトレア嬢よりもおっとりした印象だ。二人とも明るい茶色の髪をしていて、目鼻立ちが整った美少女だった。

「こちらこそ宜しくお願ひします。本日はお二人に贈り物がありまして」

「あら、何ですか？」

「こちらです」

待機していた侍従から手の平に乗る大きさの筒を二つ受け取り、二人に渡す。

「これは天華国の品物でして、筒の中を覗くと美しい星が見える、万華鏡という物です」

「星が見えるのですか？」

そう言っつて二人は片目をつぶり万華鏡の中を覗き込む。

「まあっ！」

「綺麗です……」

感嘆した二人を見てほっとする。気に入ってもらって良かった。

「ありがとうございます。ジュリア様」

「お気に召したようで何よりです」

「ジュリア殿、二人も喜んでるよ、ありがとう」
メディル公爵がそう言うと、父上が目配せしてくる。子供の時間
は終わりのようだ。

親子（前書き）

短めです。

親子

挨拶をした後はアルフレッド様を中心に派閥の子供達で親交を深めて行った。結局夜会は深夜二時頃まで続き、そこでお開きとなった。

侍従を連れて家に帰る夜道は暗く、月明かりが僅かに光る限りだ。メディル邸からアルベル邸までは歩き終え屋敷の中に入る。帰ってから一息ついた後、父上に話しかける。

「父上、お話ししたい事があります」

「何だ？ 言ってみなさい」

父上は椅子に腰掛け、正装を着崩している。

「はい、本日の夜会の事です。アルフレッド様とお話しする機会がありました。そこでアルフレッド様は、公爵家の長男としてより良く民衆を導かならねばならないとおっしゃられておりました」

「……」

父上もそれなりに大事な事だと判断しているのか、俺の目を見据えながら静かに聞いてくれている。

「そのために努めて勉学に励み、知識を蓄えなければなりません。その話しをお聞きして私は思いました。私は今まで何かを為すために知識を増やしていた訳ではありませんが、私もアルフレッド様のように貴族として、高貴なる者の義務として民衆を導かなければならないと。しかし私はまだ若輩の身、当然のように力がありません。なので辺境伯領の一部を頂き、そこで経験を積みたく存じます。許可をいただけますか」

父上は俯き、顎に手を当てながら数秒黙考し、「そうか……」と呟いた。

再び顔を上げた父は優しげな表情をしていて、瞳からは寂しさと

嬉しさが混じり合ったものを感じた。たぶん子供が自立しようとした事が嬉しい反面、抜け落ちるような寂しさがあるのだろう。

自分で言うのも何だが、父上と母上は私を溺愛している。貴族の長男、次男は将来家を継ぐ為に、厳しく躪られる傾向が強い。が、三男以降は家督を継ぐ可能性が低く、甘やかされるか足蹴にされるかだ。(俺にとっては)幸い、病弱だった事もあってか前者だった。なるほど、ジュリアはそっちを選んだかあ……。ジュリアなら末は大臣も無理ではないと思うがな。まあ、ジュリアが選んだのなら反対はしない。拝爵の手筈は私が整えておくが、どこが欲しいんだ？」

「どこが？ とはアルベル辺境伯領のどこを領土にするかと言うことだ。当然の如くアルバロン島の近くが望ましいので、そこを要求する。」

「セイロン地方です。父上」

「セイロン地方？ わざわざ辺鄙な場所を選ばなくても良いんだぞ。父上が驚くのも無理はない。セイロン地方はアイカシア王国の最南端に位置する、葡萄とオリーブが細々と栽培されている土地だからだ。」

「いえ、セイロン地方が良いんです。かの地方はアルベル辺境伯領でも開発が遅れていますし、エルリック兄様もシャンデの開拓に一杯で手が回らないようですから」

「そうか……でも本当に良いんだな？」

念を押す父上。

「はい、」

「ではそのようにしよう」

ふつつと息をついた父上は軽い笑い、椅子から立ち上がる。そして俺にすつと近づき、頭をくしゃくしゃに撫でる。

「……」

しばらく無言のまま撫でられ続ける。父上の暖かい体温を感じながら思う、俺はあまり父上を父親だとは思えない。何と言うか親し

い他人としか思えないのだ。

「ジュリアは昔から病弱な事以外は手のかからない子だったな」

でも、父上も母上も当然のように我が子を愛す。

髪が一房掬い上げられる。

「私がジュリアぐらいの頃は漠然としか貴族の義務を理解していなかった。だがジュリアはもう貴族としての責務がなんたるかを理解している」

父上は穏やかな声で語りながら、掬い上げた髪を丁寧に梳く。

「ただ早熟なのか、そうでないのかはわからない。ジュリアは死にかけた経験があるせいかな、私には酷く達観しているように、世の中を煩わしい物のように感じているのではないかと思う事がある」

何もかもが心地好くて。

「不思議だな。我が子の事なのに何もわからない。でも」

父上の胸に顔を埋めているから、父上の表情はわからない。ただ、

「 やりたい事を見つけたんだろ。だったら全力でやりなさい」

不思議と父上の顔がはつきりと浮かんだ。慈しむ顔だった。

「それから私をもっと頼りなさい。マリアもだ」

「……………」

俺は何も言えなかった。だけど父上にはそれで伝わったらしい。

まったく、人は見ているものだ。

温もりが消える。

「今日はもう遅いから、寝なさい。エルリックには私から連絡して

おく」

父上は扉に手をかける。

「父上！」

振り向く。

「……………おやすみなさい」

笑った。

「ああ、おやすみ」

魔眼（前書き）

殺傷描写があります。苦手な人は注意してください。

後、主人公は善人ではないです。すべてに優先してチョコレートです。

俺は王都に冬が到来する前にアルベル領に戻る事にした。正式な拜爵は成人を迎えたら行われるので、次に訪れるのは一年強後だ。やらなければならぬことは沢山ある。チョコレート^スの為に頑張らなければ。

「チエツクメイト」

十×十マスの戦場の上、相手の王を詰ませる。アルベル領への道中は基本的に暇なのもつぱら本を読むか、今の様に戦盤^{チェス}をするかだ。

相手をしていたアリカは盤上を見つめた後うなだれる。最初の頃はわりと好戦的な目をしていたが十回目を超えはじめた頃からいじけはじめた。

俺が勝つと、基本的に無表情で透かした顔のアリカが、僅かに頬を紅潮させ上目遣いで控え目に睨みつけてくる姿が可愛くて、つい虐めてしまった。

別にアリカが弱い訳ではない、俺が強すぎるのだ。アリカも他の護衛についている騎士よりかは普通に強かったのだが、転生する前からボードゲームが好きだった俺とは保有する戦術の数が違う。それに加えこの体の元々の地頭の良さ。記憶力と頭の回転が大幅に良くなっていた。言うなれば物凄く集中できている時の状態。テスト前に漫画を読む時 が常時続いている感じだ。

話しが逸れたが今は前述の通り、次の目的地であるササを目指している。ササは王都フルストルクとアルベル家の本宅があるリラ

ンカの街のちょうど真ん中に位置していて、特にこれと言った特産品のない普遍的な街だ。

そろそろ戦盤チェスにも飽きてきた。何となく思いついて、近くにいる護衛の騎士に後どのくらいか？ と聞くと、後一刻程です、と帰って来た。

今は太陽が西の空に沈んで行き、ササへと向かう整備された街道を囲む森は仄かに暗くなっている。元々鬱蒼とした森は何かが出そうだった。

当然山賊はいる。だが警戒はしなくて良い。貴族の馬車には魔法の使える護衛が必ずと言って良いほど乗っており、並の戦士と並の魔術師では圧倒的に魔術師が強いからだ。と言う訳で山賊は主に護衛の少なさそうな商人を狙うのだった。

しかし山賊がいないからと言って絶対に安全とは言えない。簡単に言えば魔物がいるのだ。勿論アルバロン島や北の永久凍土にいるような強力な魔物はいないが、小鬼ゴブリンや森狼ワイルド・ウルフ程度ならそこそこ遭遇する。事実行きには一度遭遇した。

暇潰しに風系統の魔術で森を警戒する。俺の魔力は一般的な魔術師の量しかなく上に治療系の魔術以外は得意ではないので、そこまですばらしい索敵はできない。まあ、する気もないのだけど。

だから、それに気づいたのは偶然だった。

人の気配？

アリカ含め騎士もそれに気づいたようだ。俺よりも索敵の腕が良い騎士の一人が素早く索敵の魔術を展開すると、側に来て状況を伝える。

「前方百メートルで、七人程の商人の集団だと思われるものが、十人程の山賊に襲われているようです」

「行きますか？」

アリカが巨大包丁を足元から取り、それに呼応するように他の騎士達も俺に視線を向ける。

一応、王国の治安を守るアイカシア王国騎士団総帥の息子だから

な。賊は狩っておくべきだろう。

「怪我しないようにな」

俺の言葉を聞くと直ぐに二人の騎士を俺に残し、騎士達が山賊の下へ向かう。

アリカと騎士二人は魔術で強化された身体能力で百メートルの距離をものの数秒で駆ける。

まずアリカが商人の護衛と交戦していた一人を奇襲し横薙ぎの一撃を放つ。男が反応できずに首を切り落とされると、アリカはそのまま遠心力を利用して体を回転させ右上から左下に逆袈裟斬りを放つが、アリカの攻撃に気づいた男は剣の両端を手で持ち斬撃を受け止める。

「くっ！」

馬車を交戦している場所に近づけていくと男の苦しみに満ちた顔が見て取れる。結局アリカが魔術によって強化した力と武器の重さで押し切り、男を二枚に卸す。

「ぐはっ!?!」

一人目の首が地面に落ちると、二人目の断末魔が響くのは同時だった。ここまで数秒程の早業。

遅れて騎士達も山賊に肉薄し、数合いで打ち勝ち心臓を貫く。残り六人。

かろうじて生き残っていた商人の護衛が状況を判断して加勢するが、剣の才がないと自覚している俺と同じくらいの実力しかない。

山賊はアリカを最初に片付ける事にしたのか、アリカを三人で囲み残りに一人ずつついた。

「死ねえっ!」

「喰らえっ!」

左右同時にかかってきた男が剣を振りかかる。男達の瞳には得体の知れない者への恐怖と手に入るはずだった物への欲望が渦巻いていた。

「……………」

アリカは無言のまま三人の位置関係を確認すると、右の男に巨大包丁を投げつけ行動を封じた後、素早く左の男の懐に潜り込む。

左の男の斬撃はアリカを捕らえる事なく宙を斬る。空振った男の手首をアリカが掴み、巴投げの要領で一拍遅れて攻撃してきた男に左の男を投げる。同士打ちで一人死ぬのを確認したアリカは、起き上がり際に右の男の心臓と額を目掛けて、太股に仕込んであった投げナイフを投擲し仕留めた。アリカは起き上がった後バランスを崩している最後の一人を蹴り倒して剣を奪い、その剣で心臓に突き刺す。

アリカが返り血を避けながら投げつけた巨大包丁を回収すると、商人の護衛は少し手こずったようだが山賊は全滅したようだった。

馬車が現場に着くと、多少土で汚れて居るけど返り血一つ浴びていないアリカが近づいて来て、

「終わりました。ジユリア様」
無表情で報告するのだった。

「助けていただいてありがとうございます」

と、喋りかけてきたのは商人であろう人物だ。結局護衛が二人死んだだけのようだった。

「当然の事をしたまでだ」

できるだけ貴族然とした態度で模範解答だと思われる返答をする。

「本当……何とお礼を言ったら良いか……」

小太りな商人は汗を流しハンカチで拭きながら、恐縮したような何かを隠しているような態度を取る。

そんな態度を訝しく思い、騎士達に目配せする。

「構いませんよ。それより“商品”は無事でしたか」

「はっ！ はい、貴方様のお蔭様で……」

うるたえる商人。やはり何かを隠している。

しばらく商人の瞳を詰問するように覗き込むと、時間が経つにつれ商人の表情に焦りの色が増してくる。

「あっ！ ありました。奴隷だと思われる人間が三人と麻薬が結構な量ありますね」

騎士の言葉を聞くやいなや、商人は絶望したかのように座り込む。アイカシアでは奴隷は合法だ。基本的には犯罪者が懲役代わりに奴隷の身に墜ちる。まあ、合法じゃない奴隷もかなりいるが、ここではそこまで重要でない。

奴隷商人には人には言えない趣味を持つ貴族のお得意様が沢山いるので、あまり強く取り締まれないのだ。だが麻薬の不法所持、特に販売目的の所持は重罪だから、終身刑、死刑は免れないだろうな。絶賛絶望中の商人を放つといて、保護された三人の奴隷を眺めている。

二人は十代後半の男女。男はなかなか立派な体格をしている、おそらく労働奴隷だろう。女の方はそれなりに着飾っているから、どこかの貴族の性奴にでもなるはずだったかも知れない。この二人は特に問題がなければササの街で解放されるだろう。

だが最後の一人はそうはならないだろうな、と思った。声には出していないが騎士達も畏れるような忌むような顔をしている。

最後の一人は全体的に薄汚れているが、紅い髪に碧色をした右目を持つ、おそらく年下であろう少女。そして。

金色に光り輝やく左目。

通称魔眼。またの名を厄災を呼ぶもの。

先天的に体が壊れる程の魔力過剰に見舞われた者の瞳は金色に光り、やがて体に限界がくると内に秘めた魔力が暴走する。過去には街の一つや二つ消えている。

よく生きていたな、と言うのが素直な感想だ。大抵は生まれて直ぐに殺されると言うのに。

そして頭の中で一つの計算が行われる。

少女が暴走するリスクと将来の忠実な駒になるだろう確率。失敗

すればかなり危ないが、成功すれば大きな戦力になる。

正直なところ多少のリスクを背負ってでも戦力は欲しい。

上手く調教できるだろうかと不安を抱きながらも、打算と僅かな憐憫で少女を引き取る事が決定したのだった。

少女

とりあえず商人をササの街の憲兵に突き出し、山賊の処理を任せ
た後、魔眼の少女を引き取る手続きをした。名目上、違法な奴隷は
解放しなければならないのだが、この少女の存在は極めて危険なの
でアルベル家が身元を預かる事にする、と言えば問題なかった。権
力とは使うものだ。まあ実際あまり守られていない法律なので憲兵
も特に気にはしなかったのだが。

そんなこんなで少女を引き取った後、予約していたササの街で一
番ランクの高い宿に入る。

最初に薄汚れた少女をアリカに風呂に入れさせる。風呂があつた
のは僥倖と言うべきか。この時代は大抵庶民は街に一つはある共同
浴場に入り、貴族は自宅にある浴場に入るのだった。

アリカと少女が風呂に入っている間、俺は部屋の一室で刺繍をし
ていた。

白を基調とした清潔感溢れる部屋はなかなか広く、キングサイズ
のベッドはふかふかとしていて気持ちが良い。

今刺繍をしている理由は、およそ俺の五十倍の魔力を持つ少女は
今直ぐにはないだろうが、魔力が抑え切れずに暴走す事がほぼ確
実なので、少女の魔力を制御するための眼帯を作る為だ。

黒い眼帯の裏地に魔力を纏わせた銀糸で魔力を制御を補助する魔
法陣を形作っていく。ついでに言えば、銀は魔力との親和性が良く、
よくアミュレットなどの魔導具に使われる金属だったりする。

魔力を操作しながら眼帯の裏から表に糸を通し一定の間隔を空け
て今度は表から裏に糸を通す。

それなりに難易度の高いこの動作は今では手慣れたもので、手早
くかつ精確に行う事ができるようになった。昔は魔力の制御練習の

為によく護符とかを作っていたなあと、懐かしく思う。

魔法陣の完成にはたいして時間がかからなかった。

アリカ達が風呂から上がるにはまだ時間がかかるだろうし、眼帯の表面に何の模様もないのは少し寂しい。まだ何か刺繍をしよう。

どうせなら凝ったものが良いかなあと考えていると、前に一度刺繍の先生が教えてくれた刺繍を思い出した。

よしそれにしよう。そう決めて必要な糸の色を侍従に用意させる。

ああ、あれは綺麗な真紅の薔薇だったな。あの少女も髪が綺麗になれば、きつと綺麗な赤だろうしちようどいい。

早速刺繍に取り掛かった。

気がつけば完全に太陽は落ちて、窓の外には黄金色の月が昇っていた。

結構時間がかかったな。手に持った薔薇の刺繍を見て、俺は達成感に包まれながら笑う。

同じ場所を何度か縫う事によって刺繍に立体感を出した真紅の薔薇は、本当にそこに存在するかのような会心のできた。

長い間集中していたせいか空腹も特に気になっっていなかったが、一部集中が途切れれば空腹が気になる。

珍しく俺の側にアリカが控えていなかったようだから、食堂で少女に食事を与えているのだろう。あの少女は見るからに栄養が足りていなかった。

ドアノブに手をかけて扉を開ける。廊下を通り抜け食堂へ向かうと、予想通り食事を取っている少女とアリカが居た。

「アリカはもう食事を取ったのか」

「いいえ、ジュリア様より先に食事を取らせて頂く訳にはいきませんから」

アリカは素面で予想通りの回答をする。何と云うか、融通の効か

ないところ有るよな。

先に食べていて良かったのに。とは言わない。昔は普通に先に食べていたのに、ある時から急に融通が効かなくなり、何度か言ったが無駄だったからだ。たぶんアリカに取って譲れない一線なんだろうなと思う。

「そうか、なら給仕に二人分の食事を頼んできてくれ。メニューは軽い物なら何でも良い」

「了解致しました」

アリカはうやうやしく頭を下げ、給仕にメニューを取りに行く。食堂は夜が遅い為か人がアリカを含め三人しか居ない。

風呂に入りこざっぱりとした少女は慣れない手つきにでゅっくりと食事を取っている。弱った体でも食べれる消化がよく栄養価の高い物だ。

アリカが食事持つてくるにはしばらく時間がかかりそうなので、少女を観察することにする。

アリカが薬品を使い手入れしたであろう髪はまだ少し艶が足りていないが、最初よりはましになっていた。

視線を下げると、骨が浮き出る程痩せこけた小柄な体には無数の傷がついているのが見え、とても痛々しい。

「……………」

俺の視線に気づいたのか少女は金色と翡翠の瞳で見上げる。その表情には怯えと警戒が混じった色が見て取れる。

不躰だったな。金色を見据え、少女を安心される為に優しく微笑む。

「僕の名前はジュリア。君の名前は何て言うのか教えてくれないかな？」

「…………… ユグレイン」

数秒の沈黙の後、少女はぽつりと囁くように答える。

「名前を覚えてくれてありがとう。ユグレインちゃん。よろしくね」
自分でも虫ずが走るような話し方だが、できる限り安心させる為

だ。

「……」

ユグレインはこくつと頷く。

頷いたのを確認すると、刺繍が終わった眼帯と他の制御よつの魔導具の指輪を渡す。

「これは僕からのお近づきの印だよ。ユグレインちゃんはこれをつけないと死んじゃうし、それに……友達もできないよ」

「……友達？」

「そう友達」

「これをつけると友達ができるの？」

あどけない顔には、僅かに希望の色が見える。間違えてはいないはずだが、決定的に何かを間違えた気がする。

「そうだよ。ほら、僕と友達になろうよ。ね？」

自分で誘導しておきながら、恐る恐る眼帯を手取る少女に、僅かな後悔を覚える。

眼帯の付け方がわからない少女を見て苦笑を浮かべながら、今後の教育計画を頭の中で反芻するのだった。

教育（前書き）

難産でした。

自分でも何書いてるかわからないです。

教育

突然だが指揮官に求められる能力とは何であろうか？ 俺は一般的ではないかも知れないがその疑問に対する解答を持っている。

簡単に言えばそれは。

それはカリスマ性だろう。指揮官は戦場で自軍の兵士達に命を賭させて敵を屠る事を命じる。人間は死の淵で嘘はつけない。だから俺は兵士が指揮官の命令なら死ぬる、と言える程の魅力が指揮官には必要だと思う。

もちろん指揮能力も大事だが、これは部下によって補う事ができる。

唐突にこのような事を話し出した理由と言うのは、それはアルベル家が指揮官の家系だからだ。昔からサラディール帝国との国境を守護していたアルベル辺境伯領は、帝国との小競り合いが絶える事はなかった。天竜山脈を挟んでいて幾分かは防衛しやすいとは言え、国土はアイカシアの方が広くとも国力は帝国の方が強い。覇権主義的な帝国の侵略から国土を防衛し続ける為に、アルベル家は兵士達を統率し続ける必要があった。

つまりアルベル家は長い帝国との闘争の中で、兵士の心を掌握する為のノウハウが蓄積されていったと言うことだ。

だから父上もエルリック兄様も兵士の心を掴む方法を知っているし、それを応用して他の閥族貴族との権力闘争を有利に進めているのだった。

結局長々とした話の中で重要な事は、アルベル家が磨きあげた人心掌握の術を一族の一員である俺も授けられていると言うことだ。だからといって俺は使う手間を考えたら億劫だったので術を使った事がないのだけだ。

だけど。と俺は僅かに揺れる馬車の中で、俺の左隣に腰掛けている少女を見る。

先日の白いワンピースではなく上等だが旅に適した服を着たユグレインは、俺が教えた魔力操作の基礎訓練を楽しそうにしている。

ユグレインの小さな手の人差し指が宙の一点指すと、指先を中心に濃く赤色で霧状の魔力が渦巻き初める。十秒弱の間、魔力は渦巻いたがやがて虚空に融けていく。

「あつ！……」

ユグレインは消えていった渦を見ながら残念そうにうなだれる。

教え始めてはや二日。驚異的な才能だと思う。一般的な魔術師は魔力の感覚を掴むまでに一月。実際に魔力を具現化するのに二月かかると言われている。事実、俺もそれくらいかった。

ユグレインは魔眼持ち故に多い魔力からか、魔力の感覚を掴むのは早いのだろう。けど具体化も早いとはね、想像以上だ。

「まだ制御が甘いね。集中力が途切れがちだし力み過ぎ、もっと力を抜いて」

俺の指摘にしょんぼりとした仔犬のような表情をするユグレイン。

「でも」

言葉を続けようとすれば、俯き気味の頭が僅かにあがる。

「前よりも良くなっているよ。頑張ってるね、ユグレイン」

さっきの鋭くて冷たい声とは一転させ、砂糖菓子よりも甘い声で優しく囁きながら、ユグレインの深紅の髪を梳く。手入れの成果が出たのかユグレインの髪は撫で心地が良い。

「あつ……」

しばらく無言で撫でていると、ユグレインは気持ち良さそうに右目を閉じて流れに身を任せる。眼帯で見えないが左目も閉じているのだろう。

俺の手が頭から離れると、名残惜しげに見詰めてくる。身長差から上目遣いになる翡翠の瞳は大きく、ユグレインを一層幼く見せる。近くにビスクドールよりも笑わないアリカが居るから隠れてしまう

が、ユグレインもなかなか整った容姿をしている。後五六年経てば綺麗に成長するだろう。

今のところ、昨日から始めたユグレイン教育計画は順調な滑り出しと言っている。最終的にユグレインを、自分でそれなりに判断することができ、かつ絶対に俺の不利益に繋がる行動を取らない駒に仕立てあげるこの計画は、まずユグレインの信頼を得る事から始まった。

俺以外の人間にはユグレインに関わらないように厳命し、俺とアリカだけがユグレインに関わる。とある聖女が言ったように、人間嫌われるより完全に無視される方が堪えるもので、存在が認められないはかなり辛い。周りの騎士達がユグレインを無視している中で俺だけがユグレインに優しく接する。それするだけでユグレインは俺に悪い印象を持つことはないだろうし、実際少なからず俺を信頼し始めた。

他にもユグレインの体についている無数の傷を治療してやったことも大きな要因となっただろう。マッチポップ的な行いではあるが、効果的に教育を行う為だ。

次に第一段階である信頼関係の構築が上手く軌道に乗り始めたら、魔術と読み書きの教育を古来からある飴と鞭戦法で行う。

そんな感じにユグレインの心を徐々に侵食していけば計画は完了だ。

「それじゃあもう一度やって見ようか」

「はい」

扱いは慎重に、されど大胆に。背反するが教育なんてそんなものだろう。ああ、自分の手腕が試されるなと思いつながらにも再び魔力操作の練習を再開した。

準備（前書き）

遅れました

準備

「父上から話は聞いたよ」

誰が見ても高価な物だとわかるであろう家具で彩られた執務室の椅子に、エルリック兄様は細く長い足を組ませている。

兄様が背もたれに体を委ねながら左手の親指で口元を押さえる様は一枚の絵画のようだ。

濟んだ氷の瞳に柳の眉、俺の身長が低い為か、見下すような視線を向けてくる。一般人だったら相手に不快感を与えかねないが、そこは流石と言うべきか。自分が相手より上位に位置し傳かれる対象であることを無意識の内に刷り込ませる。人の上に立つべくして生まれてきたと思わせる人だ。

「セイロン地方を開拓したいみたいだね。私としても、あの地方は遊ばせて置くにはもったいないで思っていたんだよ」

兄様は足を右から左に組み替える。何気ない動作すら絵になる人だ。

今まではただの事実確認のようなもので、特に兄様に表情はなかったのだが、そう言えば、と何かを思いついたようで、少し機嫌の良さそうな表情には疑問符が浮かんでいる。

「今までジュリアが何かをしたと言った事はなかったのに、急にどうしたんだい？ 何か王都で興味深い事でもあったのかな？」

そう言っただけで兄様が僅かに首を傾げると、艶っぽい蜂蜜色の金髪がさらりと動く。普通男がしたら気持ち悪い動作だが、何度でも言うが兄様は美形だ。恐ろしい事に普通に似合っている。

別に隠す事でもないのだから力カオを見たからと言うだけでは理由が弱すぎる。色々突っ込まれるのは面倒だ、と思いつつ適当に省略することにする。ここで嘘をつかないのは、兄様の前で嘘をつい

てもばれるだけだからだ。

「王都では色々あったのですが、特にですね……、シャルロット殿下とアルフレッド様にお会いできた事が大きかったです。シャルロット殿下には王立図書館でお会いしたのですけど、噂に違わぬ御聡明さで、私とそう代わらない年齢でいらっしやるのに、その麗しい御心でこの国を導く為に励まれておられました。夜会でお会いしたアルフレッド様も同じように、貴族としての義務を踏まえ行動に移されていきました。そのお二方を見て、私も何かできないかと考えたところ、開発が遅れてるセイロン地方を開拓し安定した食料の供給地にすれば、数年前に起きた規模の大飢饉が今後起きたとしても、餓死者を出さずに済むのではないかと思ひましまして」

俺の長い独白を聞いていた兄様は、「そう」と短く呟き、しばらく俺の目を見据えて考え込む。

氷の瞳に飲み込まれそうになる。判決を待つ咎人の気分だ。悪い事をしている訳ではないのだけれども。

「……嘘はついてないみたいだね」

長くとも短くとも感じとれる時間の後判決が下されると、兄様から放たれる奇妙な威圧感が薄くなる。

「もつともそれだけが理由ではなさそうだけど。まあ、理由なんて関係ないか」

「……………」

兄様はふつと息を吐き、視線を宙に漂わせる。再び視線が俺に合わさると、兄様は話は変わるけど、と前置きして今日の本題を切り出す。

「アルベル家としてはセイロン地方の開拓に金貨千枚を初期投資として出資する予定だけど、他に必要なものはあるかい？」

金貨千枚か、想像以上だ。物価の違いもあるから一概に言えないがおよそ一億円だと考えてもらえたらいい。金貨千枚は多いけれど、多いと言っても普通の方法で開拓したら絶対に足りない額だ。

その懸念が顔に出ていたのか、兄様は補足の為の言葉を発する。

「あくまでこれは初期投資だから、結果を出せばもう少し出す予定だよ」

「そうですね、ありがとうございます。私は他に、サルサとロバート、後は……腕の立つ領兵を数人お貸しただけたら後は何とかします」

サルサとロバートは俺の剣と魔術の師匠である。二人とも歳の行ったおじさんで、俺の事を孫のように可愛がってくれている。

「それだけでいいのかい？」

兄様は驚いていたが、俺の態度で嘘じゃないと理解したようで、

「そうか……。こちらも人手が足りないから好都合と言えば好都合何だけどね。ちなみにどうやって開拓するつもりなんだい？」

と疑問の要因を尋ねる。

「そうですね……今のところは奴隷を買って開拓に当たらせようと思っております」

「奴隷ね……」

兄様は難しい表情をして考え込む。

「普通にやれば上手く行かないと思うけど、ジュリアには何か考えがあるんだろう？」

兄様の問いに頷く。勝算があるから奴隷を使う方法で開拓するのだ。

「まあそうだろうね。結局さっきの支援内容で良かったのかい？」

「はい」

兄様が俺の返事を確認して、この話は終わりになるが、最後に一つだけ付け加えられる。

「一応お目付け役としてユーザーを就けるから、報告はしなくていい。ユーザー自体も有能な文官だからこき使ってやりなさい。私からはこれ以上話す事はないけど、ジュリアは？」

「いえ、ありません」

「ああ、セイロン地方にはいつ入るのかな？」

「一週間後を目処に考えています」

「わかった。もう下がっても構わないよ」

兄様に一礼して扉を開ける。

ふう、と扉の外で溜息をつく。兄様と話すのは疲れる。

まあ、最初から金策が必要になることはわかっていた。結構な額貰えたからいいとするか。

これからが本番だよな、と決意を固める。

そしてこれから一週間セイロン地方に引っ越す準備をすることになる。

煉瓦（前書き）

サブタイトルが思い付かなくなってきた。煉瓦あんまり関係ないです。

煉瓦

「ジュリア様。もうじきルルの街に着きます」

エルリック兄様との会話から十日後、三日の旅路を乗り越えセイロン地方の唯一外壁のある街ルルが見えてきた。

声をかけてきた男はユースー。俺よりも頭一つ分以上背が高く漆黒の髪をオールバックにしている兄様の部下に当たる人物だ。鋭い眼光はとてモ十六歳には見えない。片眼鏡モノクルが似合いそうな有能な文官だ。

馬車の中から見える街壁は赤く、ゆつくりと大きくなって行く。そして門の前に立つ衛兵が見えてくると、その大きさが大人二人分より高い事がわかる。小さい街なのに立派な物だと思つ。まあ、街の立地を考えれば必須何だろうけど。

「大きいですね」

例の如く隣に座っているユグレインが楽しそうに話しかけてくる。これより大きい外壁ならランカで見ただろうに。

「そうだね」

「はい！」

俺の生返事気味の言葉にも本当に楽しそうに返事をする。ユグレ

インは教育の結果か、俺以外の前ではびくびくして目を合わせないのに、俺の前では酷く従順で声をかける度に心酔したような顔をする。

ちよつと問題だよな……。あれだけ他の人間を怖がっていると、使い物にならない。いずれ何とかしないと。

「そう言えば、ジュリア様。ルルってどんな所何ですか？」

だけど、目尻を上げ翡翠の瞳を輝かせるユグレインを見ると、特に問題がないように見えるから不思議だ。

そういえばセイロン地方について説明していなかったなと思い出し、説明を始める。

ルルはセイロン地方の開拓の拠点になる海にほど近い人口千数百人の街だ。今後はセイロン地方はアルバロン島の開拓に必要な物資の供給地として開拓を進める予定だ。主だった産業は街壁の外の柑橘類とオリーブ、海では塩だ。

セイロン地方は概ね二つの気候に分けられる。一つは内海に面した乾燥した気候。ルルのこれに当て嵌まり、降水がほとんどなく土地は豊かとは言えない。ルル以外の小さな村落でも柑橘類やオリーブが細々と栽培されている。もう一つは大陸最西端にある火山を中心にした温暖で一定量の降水がある気候。火山の恵みを受けた豊饒な土地だ。

この立地条件だけを見れば人が住むのに適した土地であるのに、何故開拓が進んでいないのか疑問に思うかも知れない。が、理由は単純だ。魔物が蔓延っているのだ。

一般的な成人男性が倒せる魔物は、魔物の中でも最弱と言われる小鬼程度だ。もっともその小鬼でさえも徒党を組む事から倒すのは難しい。故に開拓を進めるには魔物を倒す戦士と実際に開拓する農民が必要となり、地球での開拓以上の困難を伴う。

「そうなんですかあ。私、ジュリア様のお力に成れるように頑張ります！」

一通り説明を終えると、ユグレインは両手を胸の前で握りやる気を見せる。まあ、ユグレインには役立つてもらわなければ困るのだが。

そんな困難極まりない開拓事業にも一つだけプラスの要因がある。それはこの世界に存在する魔法と言う異能だ。ユグレインのような例外は少ないが、この世界の人間は少なからず自らの体に魔力を宿し、その中で適性のある者は万物の理を支配する。

ただ魔術もいいことづくめではない。その中の一つは習得には金がかかる事だ。魔術の習得、鍛練方法は門外不出の場合が多く、魔術を教授して貰うには多額の謝礼が必要になるからだ。他には、人は皆得手不得手とする魔術系統があり、すべての人間が戦闘に役立つ魔術を覚えられる訳ではないと言う事がある。

ちなみに上記前者の理由から魔術を扱える人間は貴族が多い。またそれは貴族が貴族たる存在であるための大きな一因でもあったりする。

その事を踏まえた上で今回俺は、魔術の才能のある子供 特に孤児や奴隷を集めて教育を施し、屯田兵としてアルバロン島の開拓

で経験を積ませ、時期が来たらアルバロン島の開発に派遣すると言
う計画を立てた。

何はともあれ、思考に耽っている間に街の中にたどり着く。粘土
でも採れるのだろうか？ 家々は赤い煉瓦で建てられている。統一
感のある街並は趣がある。

もし粘土が採れるなら陶器、磁器を工芸品に成長させれば、開拓
に必要な資金の足しになるかも。

「ようこそおいでくださいました。ルルの町長をしておりますジヨ
ンでございます。この度は何卒宜しくお願いします」

馬車から降りると、小柄で小太り男が禿頭にかいた汗を拭きなが
ら、頭をペコペコさげてくる。

「そうだな、宜しく頼む」

できるだけ威圧的に、威厳をだして。こういうのは初めが肝心で、
子供だからと嘗められたら後々面倒になる。最初に立場をわからる
事が重要だ。

「案内しろ」

「はっ、はい。わかりました……。こちらへお越しただけですか」

案内された赤い煉瓦の建物は、町で一番立派な建物なんだろうが、
王都の屋敷やリランカの本宅に比べると見劣りする。でも、本来家
なんて清潔で安全であれば気にしない性なので特に問題はない。

「お気に召されましたか？」

おどおどした態度にイラツとくるが、仕方ない事だと割り切っているので不機嫌になったりしない。

俺の側で控えていれば多少の無礼は見逃す事がわかるが、相手は初対面だ。上位の貴族の機嫌を損ねたとなれば打ち首になってもおかしくないのだから当然の反応なんだろう。

「悪くはない。住居を用意した事には感謝する」

嘗められたらいけないが、理不尽な事はしてはいけない。人間は正直なもので、表面上は従っていても内心軽蔑していれば仕事の能率は落ちるものだ。

「……………！？ 恐縮です」

案の定町長は驚いている。仮にも辺境伯の血筋の者が平民風情に礼を言うとは思っていなかったに違いない。

その後、適当に会話しながら、持ってきた荷物を運び込ませる。そして夜、町長と会食して一日を終えた。

訓練（前書き）

短い上に、会話が続かない……

訓練

時は流れ、ルルの町を拠点にし始めてから一ヶ月たった。

ユーザーに呼び寄せさせた奴隷商人から、健康で魔術的素養のある十歳程度の人間を二十人買い、現在思案している教育計画の第一期生として指導を始めている。何故二十人なのかと言えば、最初から何百人も指導できるはずもない、効率的な教育方法がわかっていない状況では多大な労力が必要となるからだ。俺が教育に関わるのは最初だけで、システムを作り上げ終えたら適任に押し付ける予定だ。

健康と言っても奴隷にしては健康であるだけで、同年代の一般的な子供よりは成長が遅れている傾向があった。そこで健康水準を高める為にバランスのいい食事を与え、体を作る為の基礎訓練をさせる。さらに魔術を覚える為に必須となる読み書きと魔力操作の基礎も平行して行っていた。

これだけの事をするのに一ヶ月。他にも連れてきた領兵に町の周辺の魔物を退治させたりしたが、本当にその程度だ。

そして今、基礎訓練をある程度こなせるようになった奴隷達を一組五人の小隊に四つに分け、俺の剣の師匠であるロバートと、アリ力で集団戦闘の指導を行っていた。

「……………」

屋敷にあるバスケットボールのコートほどの庭は、なかなか手入れがなされていて趣味がいい。その庭の中心で極彩色の花々を背景に、青眼に剣を構え無言で佇むアリカは冒しがたい静謐な空気に包まれている。

老いたロバートは実際に戦う事ができないので槍の基本的な扱いと仲間との連携方法を教え、実際にはアリカが訓練をつけている。

小隊の一つがアリカを囲み槍を構える。が、隙のない構えと人形のような硬質な美しさから発せられる威圧感に一步も動く事ができない。

まあ、仕方ない事だと思う。アリカが意識してやっているのかはわからないが、色のない切れ長の瞳はいつも怒っているように見えて取っ付きにくい印象を与える。簡単に言えば美人が怒ると怖いと言う奴だ。

「やあああー！」

刻み付けられた男の蛮勇か、小隊の中ではわりと好い体格をしている少年が腰ために槍を構えながらアリカに突撃する。

「……………」

アリカは少年の突撃を冷めた目で見ながら訓練用の木剣で槍の穂先をちよいと逸らし、少年の溝尾に、少年の突撃の勢いを利用した膝蹴りを食らわす。

痛そうだなあとは思うが所詮他人事なので、それ以上興味湧かなかった。

うめき声をあげる少年を歯牙にもかけず、アリカはただ一言。

「……次」

「凄いですね」

「ああ確かにな」

ユグレインが隣でほんわかした表情をしながらも魔力操作の練習に励んでいる。上手くなったもので魔力を蝶の形にし、維持している。相変わらず魔術に関しては天才的な成長速度だ。ちなみに俺は五年間の鍛練により同時に七匹の蝶々を舞わせる事ができるが、ユグレインが追いつく日はそう遠くないだろう。

たまに運ばれてくる怪我人を治療しながら、ユグレインと訓練を観戦している。アリカは基本的に怪我をさせないように手加減しているのだが、体に覚えるさせる主義なのか致命的な隙を見せた際には容赦ない一撃を叩きこんでいた。

アリカが小隊一組を相手している間に、ロバートが残り三組をアリカ戦の反省を踏まえた上で戦い方を教える。最初からできるだけ実践的な訓練を頼んだ結果がこれだ。俺の魔術の師匠サルサによると後二ヶ月もすれば初級魔術を使えるようになるらしいので、その頃を目処に実戦を経験させるつもりだ。

本来なら訓練を手伝っている場合ではないのだが、如何せんすることがない。だがこういう事は焦っても仕方がないとわかってはいるのだが、地球で食べたチョコレートの味を思い出す度に切なくなり、恋にも似た感情を自覚する。

二十歳までには食べたいなあ。想いは積もる一方だが今は着実に進めていくしかない。

そんなこんなで訓練を眺めるのだった。

転生と出会い（前書き）

本当すいません。口は災いの元ですね。もうできない事はいいいま
せん。

前から言ってたリメイクです。

全面改稿です。

今までのはそのうち消します。

更新は不定期です。

書き溜まったら更新です。

気が向いたら見てやって下さい。

感想には返事しないと思います。

（書いてくれる人がいたらだけど）

ちょっと登場人物が多いんでサラッと流しちゃって下さい。

転生と出会い

長い夏が終わりを告げ、冷涼な秋との境目の日。温い風が体に纏わり付き、不快ではないが心地好くもないどつつかずの気持ちになる。

窓から差し込む陽射しは見てわかるほど熱いが、空気が乾燥しているおかげで見かけよりは過ごし易い。

退屈だ……。

窓の外の景色を眺めながら、俺こと、ジュリアス・リ・アルベルは物思いに沈む。

日本で大学生をしていた“俺”は風邪を拗らせて呆気なく死んだ。今から十四年弱前の事だ。家族や恋人がいなかった訳ではなく、まあ、間が、運が悪かったとしか言いようがない。

ここまではそれなりにある話のだが、問題はここからだ。有り体に言えば、俺は転生したのだった。それも異世界に、剣と魔法の魔獣蔓延の世界にだ。そして、国 アイカシア王国で一二を争う金持ちかつ建国から存在する伝統ある武門の家系に生まれた事は限りなく恵まれている事なのだろう。

俺が初めて転生したと理解するまでは思い返すのが情けなく、恥ずかしくなるほど混乱していた。

考えてみれば当然だ。俺は神や天使に転生やらなんやらさせられた訳ではなく、唐突に、本当にいつの間にかこの世界に生まれ落ちたのだから。状況を把握しようにも赤子の頭では思考が処理できなかった。常時知恵熱状態で、暗転と覚醒を繰り返していたから当然だ

ろう（あつてほしい）。

そんな俺に許された唯一の事がこの理不尽を呪い叫ぶ事だった訳だが、親からしてみればよく泣き叫ぶ手のかかる子供に過ぎなかったんだろうと思う。

なんやかんやで俺が世界に適應してくると、俺の周りの環境が日本と比べ異質なものだとして理解するのも早かった。高位の貴族として周りの人間に傅かれる日々。実の母ではなく乳母に世話される事が当たり前な日常。俺の日本人的な、小市民的な思考が初めはそれを拒絶したが、こちらの十四年近い生活の中でそれは擦り切れてなくなった。

武門の家系に生まれながら病弱で剣や魔術の才に恵まれる事は無かったが、歳の離れた優秀で優しい二人の兄や姉がいるお陰で責任のある立場にならなくていい気楽さ。俺を耽溺する身内には甘い両親。権力と金、そのどちらも自分の力ではないとしても蜜の味を知ってしまったえば、悪くはないと感じていた。

けれども。

日本とどちらがいいかと言われてたら、俺は日本をとるだろう。娯楽の少ないこの世界。私欲に走った貴族。腐敗した宗教。

それらに比べると日本の汚職など甘いものだ。当たり前だと思っ価値観が破壊されていけば、だいたい人間がそう思うだろう。

まあ、そんな厭世に浸ってもその権化に俺も入っているんだがなと自嘲する。現状への不満と現状にしがみつく矛盾。そんな二律背反を抱えながらも俺は何もしないんだろうと思う。革命の兆しがちらほらと見えはじめた今、遠くない未来に決壊を迎えるとしても、どうせ一度なくした命だと割り切り、断頭台の露に消えることになろうとも、ね。

ふと、窓の下で働く生まれながら奴隷の少女に意識を向ける。自由のない様子を見ると、少女のように生まれなかったことを感謝する。一つ違えば俺がそうなる可能性もあったのだから。生まれた時から自ら考える事を放棄し命令に絶対服従を強制された、なかなか整った顔をした少女はきっと自分が何故このような運命にあるのか疑問に思う事なく死んで逝くのだろう。哀しい事に奴隷の子供は奴隷なのだ。

どうせ半刻もすれば忘れる事を考えながら、もう一つ日本がよい理由を思い出す。生前の大好物が無いことだ。黒い宝石、お口の恋人。チヨコレートがこの世界には無かった。

眼下で忙しく蠢く使用人達。三日後に控える俺の誕生日の用意の為だ。合わせて三十年以上生きてきた俺は自分の誕生日にはあまり関心がないが、今回は別だ。

こっちでは十四歳が成人なので、成人の儀を兼ねた今回はかなりの規模の会になる。

それに俺は政治の上ではそれほど重要な地位に居ないにしろ、辺境伯という地位にありながら実質的には、公爵と同等以上の伝統と実績に裏付けされた権威を持つ名門アルベル家の三男。要するに結婚できるようになるので見合い、婚約者選びも兼ねていると言うことだ。

長兄も次兄も身分が釣り合う令嬢と婚約済みなので成ろうと思っても妾にし成れないが、現在独身である程度融通の効く三男である俺は多少敷居が低い。なので逆玉狙いの縁談が絶えないのだ。

候補はある程度絞られているから政略結婚であることには違いな

いが、親からしたら最大限の愛情なのだろう。二人の兄は結婚に意志を挟めなかった事に比べれば、選択肢があるだけ幸せだと思う。第一、いい年して結婚に幻想をもっている訳では無いことだし。

と言うわけで名門の面子がかかっている今回の誕生会はちよつと気が重い。色々とお偉いさんが来て、対応をしなければいけないのだ。

そのために家でも、多大な財力に物を言わせて高価な物を用意している訳だが昔から金があった訳ではない。むしろ貧乏だった。

一言で言えばアルベル家は脳筋だった。

典型的な名誉はあるが金はない家系で、王族に忠誠を誓い国境の防衛に全力を注いでいた為か領地経営を蔑ろにし、度重なる隣国の侵攻が重なった為か、その日の暮らしにも困窮するほど落ちぶれていた。二十年以上前の事だ。

が転機は訪れる。当時最大の商会だったオネカ家との婚約。辺境伯家の嫡子だった父と商会の一人娘だった母の結婚は、つまるところ権威の欲しい金持ちと金のない名門の利害が結びついたものだった。

両親の結婚は政治的なものだったが、仲が悪い訳ではなくむしろかなり良い分類に入る。これも俺が政略結婚にそこまで嫌悪感を抱かない理由の一つだ。

閑話休題。

話が逸れたが今もお偉いさんの対応をするために控えている訳だ。

「ジュリアス様。メディル公爵様御一行が到着されました」

暇潰しの思考が一段落したところに、俺付きの侍従であるアリカから上客の到着を言付かった。

メデイル公爵様御一行は召使に応接間に通されるはずなので、先回りして待たないといけない。

二階の自室から一階の応接間へとアリカに先導されながら向かう。照明に照らされて光り輝く大理石の廊下にはあまり調度品は置かれていなく、金がない頃の名残か、壺やら何やらはなく全身を堅い鎧で騎士の置物しかない。

お伽話の中にあるように真紅の絨毯が引かれた階段の踊り場で、ふと気になった事をアリカに聞いて見る。

「なあアリカ」

三步程前を歩いていたアリカは立ち止まり身を翻すと、蜂蜜色をした髪がふわりと乱れる。

「何でしょうか、ジュリアス様」

伶俐さを感じさせる紅玉ルビの双眸に覗き込まれると、この護衛兼秘書兼侍女なら疑問に答えられるだろうなと思わせられる。

「メデイル公爵はどんな人物か知ってるか？」

「いえ詳しくは存じ上げません。おそらくジュリアス様がお知りになっっている事と大差ないと思います」

再び歩きだしながら俺の知っている知識を整理する。

メデイル公爵家。王領の傍に広大な領地を持つ建国からの忠臣。王家の血が混じる伝統ある血統は三公爵の一角を占める程で、同じ軍閥としてアルベル家とも親交が深い。例えるならばアルベル家は門番として、メデイル家は王の最後の騎士として、それぞれ忠義を

尽くしてきた。

父上と現メディル公爵は騎士学校での同期らしく親交があったらしく、王都で働く父上達は頻繁に食事を共にする仲らしい。

こんなところか。

「私が知っている事もそのくらいです」

やっぱりそんなものか。

俺が一通り話すとアリカが振り向かず返事をする。大理石の床に足音がこつこつと響く。

しばらく歩いていると応接間に辿り着いたのでアリカが立ち止まる。

そして不意に思い付いたように、ご存知でしょうが、と前置きして振り返る。

「メディル公爵の御令嬢であるカトレア様とアイリス様はジュリアス様の婚約者候補でいらっしやいますね」

「……」

「ではお入り下さい」

何故当たり前の事を？

俺が何か言うよりも早く次の言葉を紡いだアリカの表情は、普段アリカの微かな感情を読み取っている俺にも判断につかない程微妙な色をしていた。

皮肉か？ 俺がここ最近婚約者候補の事を懸念していたからか？ どうこう思うよりも珍しいと思う。アリカがこのような類いの事をするのはたぶん凄く久しぶりだ。記憶にある限り七年以上前だろう。

何か嫌な事でもあったのか。

俺はアリカの静かに揺れる炎のような瞳を一瞥するが、そこに全く温度を感じる事ができなかった。

落ち着いた雰囲気の応接間は身内鼻屑を差し引いてもとても趣味がいいと思う。高価な調度品達が完璧に調和し、誰が見ても品があると答えるだろう。

黒革のソファの後ろには、招待客であるメディル公爵御一行が。奥方は亡くなっているらしく、公爵と三人の子供での御来迎だ。

「今回は愚弟の為に遠路遙々お越しいただきありがとうございます」

メディル公爵様御一行を迎えた俺と兄合わせて六人はそんな部屋の中にいる。耳に長兄 エルリック兄様の声が心地好く響く。柔らかな声だが言葉に強い人を従わせるような力がある。貴族の威厳だろうか？

「気にすることはない。他ならぬ君の父の息子だからね。長い旅路を歩むかいがあると云うものだ」

兄の言葉に應えるメディル公爵は一言で言えば“大きい”人だ。武人として現役だと一目でわかる体つきと纏う空気が合わさって、威厳が滲み出てる。

結構碎けた言い方をしているのは無駄に飾った儀礼が嫌いなのだろう。合理的な性格だと聞いているし、面倒な事が嫌いなんだろうと思う。それに祝いの言葉だが純粹に祝ってくれている部分もあるのだろう、父上と親しい事や長年の良い付き合いは事実みたいだ。

今回は公的な様で私的な行事な訳だし。

ちなみに長い旅路と言うのは比喻で実際は竜籠と呼ばれる乗り物で一日かけて王都から空を飛んできた。馬車でなら一週間だ。

公爵の挨拶の後、エルリック兄様はそんなメディル公爵の意志を読み取ったのか、随分簡略した挨拶をし、それに応えるメディル公爵も普通より手短に終えた。

「ジュリアス」

挨拶が一段落したところでエルリック兄様のアイスブルーの瞳で目配せされる。

ああ、そういうことかと理解する。日本で培った空気を読む能力はこっちでも結構役に立つ。

「遅らせながらご挨拶させていただきます、ジュリアス・リ・アルベルと申します。是非今後御見知り下さい」

その台詞を言い終わると同時に、公爵に対する礼をする。日本に居た頃の容姿では様にならなかつただろうが、幸いな事に母上の美貌を受け継いだ今の容姿だと格好がつく。

「ああ、宜しく。ジュリアス君は母君にそっくりだね。一目見ただけでわかったよ。髪と瞳の色は本当良く似てるけど、眉は父に似ているね」

そう言って感慨深そうに遠い目をしている公爵。友人の子供も見たらそんな風になるのだろうか。

「噂通り聡明そうな子だね。アルフレッド、カトレア、アイリス。お前達もジュリア殿に挨拶しなさい」

気を持ち直したメディル公爵に促され、俺より少し年上で色素の薄い茶色をした髪の貴公子然とした少年　公爵の長男　が前に
でる。

「私はアルフレッド・ラ・メディル。宜しく」

差し出された手を握り返し、握手を交わす。がっちりと手を握り合うこと数秒。

「君とはいい関係を築けたらいいと思っているよ」

「こちらこそ」

柔らかな笑顔とは裏腹に言葉に力強さを感じる。見かけ通りの優男ではなさそうだ。

「そう言えば、君は戦盤^{チェス}が得意みたいだね。後で一局指さないかい？」

日本に居た頃からボードゲームは得意だった。この世界で負けたのも片手で数え切れる俺に勝負を挑むとは面白い。相手をしてやるう。

「手加減しませんよ」

「構わないよ」

相對しながら笑い合う俺達。アルフレッドとは仲良く成れそうだ。一段落すると次は婚約者候補である双子の令嬢が前に出て来て一

礼をする。歳は俺の一つ下だろう。

ドレスを摘んで優雅な一礼。大輪の薔薇が咲き誇るような笑顔は表面上は友好的だが、態度の端々や纏う雰囲気には牽制の意を感じられる。

「わたくしはカトレアと申しますの。ジュリアス様宜しくお願いしますわ」

深紅のワンピースを着たカトレアは目鼻がくつきりと整った美しい顔立ちをしていて将来社交界の華になることが予想できる。

言葉だけは丁寧だが、態度がすべてを物語っている。警戒されていると言うか、完全に嫌われている。理由は一つしか思いつかない。やはり女の子にとって結婚は特別なのだろうか。

姿形は全く違うけれど、何かと気難しかった姪っ子を思い出す。すぐ拗ねてしまうのにお菓子やらで釣ると直ぐにひっかかる。そんな子供特有の単純でないようでも単純な大人の階段を上る途中。

「こちらこそ宜しくお願ひしますね」
「……」

公爵や兄様に見えないように器用に睨んでくるが、気づかない振りをしてもう一人に視線を向ける。

「……私はアイリス……と申します」
「宜しく」

表面上（というか見かけ）はおしとやかだが、内に秘めたる激情（子供っぽさ）が見て取れるカトレアとは違い、アイリスと名乗った栗色の髪少女からは気力といったものがほとんど感じられない。

碧い瞳は虚空をさまよい、視線を合わせようとはしない。コミュニケーション能力がないと言うよりかは興味がないと言う印象を受ける。

マイペースと言えば聞こえがいいが、協調性のなさ気な、学者タイプな子に見えた。

何か面倒になったなあ。もうちょっとクレーバーな子だったら楽しかったのだけど。

前に姉から、父上がメデイル公爵と酒の席でお互いの子供も結婚させようみたいな約束をしたらしい、と言う話を聞いた事がある。政治的にも力のある家同士が結び付く事は悪くないと思うし、家の婚約者候補としては魅力的だ。

と思うのだけど……………。ねえ？

流石にここまで友好的ではないと煩わしくなってしまう。まだ婚約者候補の段階だと言うのに…………。まあ、複雑な年頃だから仕方ないか。

今回は顔見せの意味合いが強いので、特に何もなく、エルリック兄様が侍従に公爵様御一行を部屋へ案内し接待させた後、お出迎えは終了した。

一番身分の高い方々のは終わったが、まだ沢山出迎えをしなければいけないと思うと、少し憂鬱だった。

二階の自室に戻り、改めて婚約者について考えてみる。

今回の誕生日パーティーに招待された婚約者候補は八家から九人。

結婚すること少なからずメリットのある家を絞って招待しているので最初はもう少し多かつたはずだ。

父上からはこの中で気に入った人物と婚約するように言われているが、だからと言ってすぐに結婚する訳ではない。この世界の結婚適齢期は十五から十八歳程度なので、今回は候補を半分減らし、その後、俺が適齢期を迎えるまで時間をかけて選んでいく予定だ。

ちなみにこつちでは愛人とか妾とかに結構寛容であり、血筋を絶やさない為にも、困わない方が甲斐性無しと蔑視される事もあったりする。

それにしても本当にどうするかな……。

父上を選んだ婚約者候補は、贈られた絵が本物に近いなら、皆がなかなか美しく可憐で甲乙つけがたい容姿だった。

正直なところ女性の好みにこだわりのない俺はどうやって候補を絞るかが問題だ。

容姿は前述の通り皆遜色ないから、やはり相手の気持ちも。

となるとあの二人は駄目だな。

思考の途中で浮かんで来るのは先程の二人の少女だ。何かあるのかは知らないが、とりあえず結婚しても上手く行くとは思えない。

無意識（と言っても多少意識して）の内に候補から外していると日課であるティータイムがやって来たようで、アリカが紅茶のセットを持ってきた。

「ジュリアス様、紅茶をお持ちしました」

「ありがとう」

アリカは慣れた手つきで、紅茶の入った白磁のポットを持ちティーカップに注ぐ。テーブルにポットを置いた後、シュガーポットから角砂糖を取り出し一つ入れる。

ちやぽんと白い塊が茶色の海に沈んでいく。

甘党だから本当はもう二つぐらい入れたい所だけど、角砂糖は高いから我慢するしかない。下手な宝石よりも平気で高いし。

アリカは銀のスプーンで紅茶を掻き混ぜて砂糖を溶かす。

四年近く見てきた動作が終わると、いつものように受け取る。

「どうぞ」

紅茶を一口含むと、ふと思いつく。

「明日は商人が来るんだっけ」

「ええ、そうですけど」

自分の分を入れ、テーブルの向かいに腰掛けたアリカが応える。

本来は主従が同席に着くことはないのだが、アリカとは長い付き合いだし、紅茶が普及してないこっちではお茶友がいないんだよね。

天華国（地球で言うなら中国と印度を足した様な国）が砂糖と共に生産、製法過程を独占している紅茶は、物流過程でとてつもなく値段が高騰している為に金持ちしか手に入らない上に、アイカシアの人々の味覚に合わないらしく、家族に勧めても受け入れてくれなかった。よって一部の好事家しか嗜んでいないのだった。

「何時？」

「夕食の後ですね」

「そうか」

商人は俺が懇意にしている行商で、世界各地の珍しい物を取り扱っている。身近な物だと、ポットの磁器も商人から手に入れた物だ。

十四歳まで後三日。

「美味しいなあ」

「そうですか」

アリカが微笑かう。

特に目的もない人生で、このビスクドールの様な付き人が笑ってくれる事が、今は一番楽しいかも知れない。

チヨコレートとの出会いが世界を波瀾に巻き込む前日。

俺は何も知らずに紅茶を飲むのだった。

商人と奴隸

十四歳まで後二日に迫った今日も夜を迎え、商人との約束の時がきた。

「御機嫌麗しゆうございます、ジュリアス様。毎度の事ながら御鼻
肩いただき感激の極みでございます」

「堅苦しいのはよせ。楽にしている」

「ではお言葉に甘えて」

屋敷の一室で商人　ザックは口上をすると、一礼し指を鳴らす。
するとザックの奴隸がこの密談用の部屋に商品を運び込み始める。
それほど広くない部屋であるので少々手狭に感じる。

商品の中で一際大きな物が一つ。一人が悠悠入れる大きさだろ
うか。黒い布に包まれたそれを運ぶ奴隸達も大変そうだ。今回は随
分と気合いが入っているようである。

「なあ、あれは何だと思う。アリカ？」

「想像し難いですが、美術品　彫刻の類いではないでしょうか」

側にはいつもと変わらず控えるアリカが。この部屋には、荷を運
び終えたザックの奴隸が殆ど退出して見栄えする女奴隸が一人だけ
残ったので俺含め四人居る。

では早速、とザックが奴隸に荷を取らせた所から商談は始まった。

「こちらはですね、天華国の更に東、白洛に伝わると言う物語を集めた物だそうです。生憎私は白洛の文字を読めないなので確かめはできませんが、信用できる商人から手に入れた物ですので品は確かです。ジュリアス様は白洛の物語はまだお知りになられていないようなので、いかがかなと思いい手に入れた次第です」

そう言われ、渡された物は質のいい黒革で飾られた本だ。中を見ていると確かに白洛の文字が見える。

「確かに本物の様だな」

俺が金と権力を使い世界中から集めている物の一つに“本”がある。娯楽の少ないこの世界では貴重な暇潰しの道具だ。それに本にはその国の文化や国力が表れるので情報収集の一貫でもあるのだ。た。

「うむ、なかなか良い品だ」

「お気に召されたようで何よりでございます」

ザックは懇篤な態度を取りながら、今回仕入れてきた他の本の紹介をしていく。内容は特に定まっておらず、俺が探していた物やアイカシアでは手に入らないものを中心に仕入れてきたようだ。

十数冊あったが俺所有の物と一つも被りが無かった。今回は運が良かった。下手すると全部持ってた何て事もあるからな。

では、と掴めない笑顔でザックは続ける。

「続いている品なのですが、こちらも天華国の物でございます、四

代程の前の天守様が愛妾に賜ただけある質の良い髪飾りでござい
ます」

「簪か」
かんざし

「流石ジュリアス様、博識でいらっっしゃいます」

一々笑顔がわざとらしい。

手の平大の細長い木に漆が塗装されており、詳しい名前はわから
ないが紅い花弁をつける花が描かれている。

そして耳かきの部分には魔力を帯びた青い宝石が付けられている。

「青薔薇水晶ローズアメジストがついているのか」

「はい、その通りです。ジュリアス様が相手ですと、セールストー
クができなくて困りますよ」

ザックは全然困ってなさそうな笑みを浮かべる。本当にさっきか
ら笑ってばかりだな。

青薔薇水晶は水晶だけあつて魔よけの効果のあり、特に精神の
平定を保つことに優れた人工アーティファクト護石だ。

天然の魔力を帯びた水晶に魔導士が定められた生み出されるのだ
が、既に製法が失われている。

「何と言つものか、今回は随分と気合いが入っているようだな。ザ
ック」

「ええ、ジュリアス様もこの度成人を迎えられ、今後とも良いお付
き合いをさせていただきたく存じております私は、全力を尽くした
次第でありますから」

相変わらず真意の読めない表情をするザック。アリカとはタイプ

が違うが優秀であることは間違いないから困るな。

「あまり期待してもらっても困るのだが……」

成人を迎え、恐らく領地と男爵位か子爵位のどちらかを分けられると思うが所詮その程度だ。力があるのはあくまでもアルベル侯爵なのだから。それに今後の事を考えると、今までは病弱だった事でかなり甘やかされていたが、これからはそうもいかないだろう。エルリック兄様はそう甘い人ではない。

「いえ、私は貴方様と良い関係でありたいと思っているだけですよ。ジュリアス様」

「買い被りだな。俺はただの道楽貴族だよ」

アルベル侯爵家が目的ではない事は明白だが、わからないな。

「なぜそこまで？」

俺に期待する。

「ただの勘ですよ。ジュリアス様についていれば絶対に損はしないというね」

「……………?」

返答しかねていると、今までは商談の邪魔にならないように限りなく消されていたアリカの気配が揺れている事に気づく。

不審に思っただけでアリカを振り向くと、アリカにしては感情を露にしている。一般的に見れば無表情なんだが。

どうしたんだ？ とアリカの瞳を覗き込むがアリカはこちらを気

づく様子がない。

「アリカ？」

「……………！？ 何でもございません」

アリカのザックを見る目は警戒しているようで心を許しているような微妙な色をしている。

なんだがな。と思いながら簪の存在を思いだす。ちょうどいいと。

「アリカ少しじっとしてて」

「……………」

簪を片手にアリカの髪を掬い上げる。さらさらとした髪は細く、照明が暗くても光輝いて美しかった。

こんな感じか、と留めてみる。女官がしてるようにはいかなかったが、元がいいからよく似合っている。金に黒がよく映えていた。

なんとなくアリカの髪が名残惜しくてしばらく頭をなでいると、アリカの少し困った視線を感じたので手を離す。

横目ではザックが思案顔をしていた。

「似合ってる」

「ありがとうございます」

慇懃な態度だが俺にはわかる。微妙に視線が合わなくて、注視して見なければわからないが、頬が僅かに朱く染まっている。照れてる。

「アリカ、似合ってるぞ」

「……！」

何て言うか、基本俺の側に控えてあまりそう言うことに耐性がな
いからな。アリカは。

が、ちよつと楽しくなってきた所で、ザックがわざとらしく咳を
しる。

「続けても」

どうぞ。アリカを見てもすっかり元通りに。

その後商談を続けていると、不意に運命の出会いが訪れる。

あまり運命と言う言葉は好きではないけれど、今回だけは信じて
もいい。出逢わなければ、朽ち果てるだけの人生だった。

「こちらはアルバロンに住む島森の民の霊薬でございます」

差し出された銀の器に入れられた黒い液体は、かつて見た“チヨ
コレートの歴史”にある物そのままだった。

「なんでもこちらはですね、万病を癒す薬でありながら、強壮効果
も期待できると言うものでして、こちらの品を森の民から手に入れ
るのは大変苦労致しました。味の保証は致しかねませんが、効果の
程は確かです」

銀の器に口を付け、一口飲む。

「苦いな」

「だけど懐かしい味だった。甘味が感じられないビターチョコ。甘いチョコが欲しい。」

「これはアルバロン島に自生しているのか？」

「ザックは俺の質問を好意的に解釈したようで、

「はい、詳しい事はわかりませんが、交渉に当たった森の民は、才力の実は森の恵み、だと言っておりましたのでそうなのでしょう」

「そうか……」

「お気に召されたようでなりよりでございます」

「喰えない笑顔を浮かべるザックの顔はどこぞの俳優だよと思える程嘘臭いが、今はその笑顔さえ、労いたいくらいだ。」

「欲しいな……」

意識することなく出た言葉に、何故人間がどこまでも欲深くなるのか、権力を追い求めるのかを理解してしまった。

「そうございますか。では次も」

「その必要はない。俺はね、本当に欲しい物は自分で手に入れる性だからね……、わざわざ交渉に行く必要はないよ」

言葉を遮られたザックは、急に欲に塗れただろっ俺の瞳を見て、引き攣った顔をしている。アリカを主の知られざる姿を見て驚いているようだ。

冷めているようで熱に浮されたこの何とも言えない気持ちは、ま

るで恋のようだった。想えば想うほど、相手が欲しくなるこの気持ち。

「とっておきがあるんだろう?」

ザックに問えば、思い出したように笑顔を取り繕って、お気に召されますよ、と言う。

今まで贈られた品とそれの大きさから考えれば、想像はついていた。

「布を」

ザックが奴隷に命令し、布を取らせ、現れたのは、世にも珍しい者だった。

処女雪の如き肌に、どんな夜よりも暗き長い髪。そして金色に輝く瞳は満月のようだ。天華の国の紅い着物が良く似合う、人形のような少女だった。

別に驚く事ではない。権力者に献上されると言うのは古今東西問わず良くあることだ。

それに今更どうこうするほど擦れていない訳ではないことだし。

それにしても聖眼持ちの少女、しかも美しい、を一介の三男坊に献上するとは、こいつ実は馬鹿なんじゃないかと思う。

したり顔のザックを無視して、少女に問う。

「俺はジュリアス。君の名は?」

天華の言葉で話しかけるが通じていないようだ。もしかと思えば

洛の言葉で話しかける。

今まで虚空を見つめていた少女が僅かに反応するが、質問の意味がわからないと言う風に首を傾げる。

『名前だ』

『名前……？』

相も変わらず少女はぼやんぼやんしている。

『わからないのか？ まあいい』

どんな夜よりも美しく深い夜。自分でも安易だと思いがこう決めた。

『本当の君の名前が何であろうと、君はここでは美夜だ』

『みや？』

『そう、みやだ。他の何者でもない、ね』

少女は理解しているのか怪しいが、みやみや、譫言のように反芻していた。

『流石でございます。白洛の言葉を解しなされるとは』

『そういつことはいい。今回はかなり有意義だったよ。アリカ袋を』

アリカに金貨の入った袋を取らせると、その中から白金貨を三枚取りザックに渡す。

『ありがたき幸せでございます』

一介の行商に渡すには過ぎた金額だ。下級貴族の屋敷ぐらいなら

建つ。諸経費を差し引いても充分な額になるだろう。

ザックが帰った後。

「どこまでついてきてくれる？」

とアリカに聞けば、当然のように、

「墓場まで御一緒いたします」と。

さもあれ運命の歯車は動きだす。

秘めたる野望を胸に。

CCと婚約者候補達（前書き）

こんばんは。

まずは感想を書いてくれた人にこの場を借りてお礼申し上げます。

模試の結果があんまり良くなかったので、これからも早くてこのペ
ースだと思えます。

たぶん誤字脱字は一区切りついたら纏めて修正します。

後、今回色々と突っ込まれそうな所がありますけど、こんな感じの
雰囲気かなと思っただけ深く考えないでくださいね。言い訳ですけど。

ココと婚約者候補達

「まずはおめでとつと言えれば良いのかな？ ジュリアス」

誰が見ても高価な物だとわかるであろう家具で彩られた執務室の椅子に、エルリック兄様は細く長い足を組ませている。

兄様が背もたれに体を委ねながら左手の親指で口元を押さえる様は一枚の絵画のようだ。

「私にはもつたいたなきお言葉にございます。エルリック兄様」

「ふつ、楽にしないで」

「はい、エルリック兄様」

澄んだ氷の瞳に柳の眉、人好きのする笑顔で、俺に視線を向けてくる。

「誰なんだい？」

女あれば思わずくらくらつとしてしまつたらう甘い表情に心地好い声。

男に蠱惑的と形容するのは普通なら違和感を感じてしまつが、兄様にはこれとないほど当て嵌まる。男でも思わずあつちの道に墮ちてしまいそうだし、事実兄様は両方イケるらしい。俺は嫌だが、こつちではそう珍しくはない事だつた。

「誰？ とは婚約者候補の事でしょうか？」

「それ以外に何かあるかい？」

「いえ、ありませんね」

出来の悪い子供を諭すような上から目線。普通の人間がしたら、確実にイラツとする仕草も兄様にかかれば、自分は傅かれる対象であると無意識の内に刷り込ませる道具の一つなのだろう。

領地経営や政治力が壊滅的だったアルベル家が軍事だけ今まで生き残ってきた理由の一つ、人心掌握の技。

「公爵の令嬢は噂通りの可憐さだったけど、ジュリアスはどう思っているのかな？」

誕生日会の初日、招待客への挨拶が終わった後、軍閥派 公爵家とアルベル家を中心にした派閥 年の近い子供達との会合があった。

「可憐な方々でしたね」

「嘘は良くないな。自分の心には正直になりなさい」

兄様が人をからかうような声を出す。

貴族が嘘つきでなくてどうするのだろうか？ それとも心の底から言っているように嘘をつけと言うことか？

「嘘など……」

「アルフレッド君に聞いたよ。人見知りのアイリスがあんなに饒舌になっっているなんて初めてだよ。もう口説き落とすなんて、ジュリアスも血は争えないみたいだね」

別に口説いている訳ではないのだが……。アイリスは見た目通りと言えばそうかも知れないが、根っからの研究者タイプだった。空を飛びたいという夢を抱いた。今までに話そうとしなかっただけで、本当は誰かに聞いて欲しかったのだろう。

「いえ本当」

「恥ずかしがる必要なんてない、欲しい物は全力で手に入れなさい」

両肩を掴んで話しかける兄はまったく話しを聞かない。意図的でないにしろあるにしろ質が悪い。

「話しは変わるけど、どこが欲しい？」

本当に話しの主導権が取れない。

「セイロン地方が欲しいです」

アルバロン島　チヨコレートがある島に一番近い地方。魔物の被害が多いが、豊かな土壌をもっている。

兄様は意外だな、と思ったようで一瞬目を見開いたが、納得という風な視線を向ける。

「セイロン地方ね。私としてもあの地方は遊ばせて置くにはもったいないって思っていたんだよ」

兄様は足を右から左に組み替える。何気ない動作すら絵になる人だ。

「でもジュリアスが魔鉱石の事を知っているなんて思わなかったよ。その事は漏らさないようにしていたんだけどね」

魔鉱石？　そんな物があるのか？

兄様を見ると今までの緩さはなく、水色の瞳は総てを見通すかのように、こちらをみてくる。

兄様が何を求めているのかはわからないが、嘘は通じないだろう。

「魔鉱石ですか？ そんな物が？」

「おや、知らなかったのかい？ そうか……」

兄様は俺を射抜くように見て、独白めいた言葉を呟した後、兄様は数秒間考え込む。

「そういう事にして置くよ」

そう言っただけで兄様が微笑む。

全く兄様の真意が量りかねない。これが経験の差なのか。

chocolate commission

チョコレート委員会。

兄様と話し終わった後、俺はチョコレート委員会 略称CCを発足させた。発足させたと言っても、正式に発表する訳でも直ぐに活動できる訳でもないのだけれど。それでも俺の成人の日に、ある種の誓約のような形で設立するのは、この世界での初めての目標を明確に心に刻みつける為だった。

チョコレートの世界、全階級への普及。これが委員会の設立理念にして至上命題だ。だってチョコレートへの好みはあるかも知れないが、それでも一度も食べない人生なんて人生じゃない。少なくとも俺にとってはそうだから。

六年。俺が二十歳になるまでにチヨコレートを普及させる。キリストもアレクサンダー大王も大した時間をかけなかった。道半ばで倒れただけかも知れないが。

六年後から逆算すると、チヨコレートの安定した生産には三四年程度しかかけられない。どんなに美味なる物でも普及するにはそれなりの時間がかかる。その上、一般庶民が普遍的に食べれるレベルまで安くする為には大量に作るしかない。しかし、この世界では手工業が主でそういう設備がない。

自室の割と大きな机にアイカシア王国とアルバロン島の地図を並べる。

俺が生まれた国アイカシアはこの世界で一番大きい中央大陸の西端に位置している。隣国との国境を天竜山脈と呼ばれる高く険しい山で遮られているので、数少ない、と言うか一つしかない山道を抑えるだけで防衛が容易な為建国以来七百年独立を保っている。

で、その唯一の山道を守備する門番がアルベル辺境伯家である。王国の南方に位置しそれなりに広い領土を持っている。俺がいる領都ランカは、山道にある砦に一番近い城塞都市かつ交易都市でもあった。

ここで隣国へ行くために陸路しか使えない理由にアルバロン島 正確には天竜山脈で繋がっているのでアルバロン半島と言うべきか(どの道陸路では行けないのだが) の存在が出てくる。沿岸線の大半が切り立った崖であり、凶悪な魔獣が蔓延るアルバロン島はとても開拓できる土地ではなく、外回りの航路は補給無しで進める程穏やかでは無かったからだ。

もう一つ誰も開拓しようとしらない理由がある。それが森の民の存在だ。基本的には知的で穏和、それなりに交易もできる相手なのだが、一族のテリトリーを侵す者には容赦しない戦闘民族だし、何よりハイスペックぶりが凄まじい。生れつきの魔力保有量が多く、扱っている言語が魔法を扱うのに適しているが恐ろしく難解な“古代上級魔法言語”であり、険しい森で暮らしているだけあり身体能力も高い。しかも情に篤く忍耐強い。隣人にするのは良いが、敵対するとこの上なく面倒な相手だった。

要するに強力な森の民を相手にした上に魔獣を駆逐し、森を開拓してまで手に入れる土地では無かったと言うことだった。

でもそれだと困るんだよね……。

指先に髪を巻き付けながら視線を天井へ向ける。

高い天井には魔力を光に変える照明がかかっているが少し眩しい。手で光を遮りながら思う。大量のチョコレートを得るには、カカロのプランテーションを作るのが一番効率のいい方法だ。

ちまちまと交易なんてやってられない。

やはり森の民を攻略するのが。。。

「ジュリアス様、アルフレッド様とアイリス様がお見えです。お通しになりますか？」

「えっ！ ああ、通してくれ」

「畏まりました」

驚いた。太陽が沈んでからしばし経つのに何の用だろうか？

アリカが扉を開けて二人を中へと案内する様子を何と無く眺めていると、出迎えの言葉をかける事を思わず忘れそうになる。

「ジュリアス、邪魔するよ」

「失礼します」

二人が部屋に入ってくる。しかし何でアイリスも？

「どうぞ、何の用ですか？」

とりあえず二人を地図を広げているテーブルに座るように誘導させると、アリカにお茶を出すように頼む。せつかくなので紅茶を勧めてみる。

「天華国のお茶だよ。一杯どうぞ」

シュガーポットから角砂糖を三つ取りだし、ティーカップに一つずついれる。

この動作にアルフレッドは驚いたようだった。

「紅いな、それに今は砂糖か？」

「そうだけど」

「流石だな。今の三つだけで近衛の鎧一式揃うぞ」

別に金がない訳ではないと思うのだが。

「流石っ言われても、自分の金じゃないからね……。それより味はどうっ？」

「おいしい」

「……」

特に話す事もなく座っていたアイリスは表情を変えず紅茶の感想を言う。それに対してアルフレッドは苦虫を噛み潰したような表情をしていた。お気に召さなかったようだ。普通に飲むなら絵になる

容姿なだけに残念。

「それでここに来た理由何だけれども、昨日、外国の魔導書が結構あるって言うていただろ？ それで、アイリスが本を読みたいみたいだから書庫に立ち入る許可が欲しいんだよ」

アルフレッドは気を取り直したようであつて爽やかに笑いかける。紅茶は給仕されてから一口分しか減つてない。

やっぱりこの国には受け入れられないのか。紅茶のおいしさがわからないとは。

「別に構わないよ」

「そうか、ありがとう」

アリカが入れてくれた紅茶を口に含み喉を通す。やっぱりおいしい。これにチョコレートがあれば最高なんだけれど。

「本当に感謝する。王都だとあまり外の本は手に入らないから」

初対面の印象とは違い、アイリスはちゃんと会話もできるし、人の気持ちを推し量る事もできるんだよね。ただ興味が無いことに対して何もしないだけであつて。

「そう長くは滞在しないだろうけど、家に居る間は自由に読んでいいから。僕以外誰も読まないしね。誰かに読まれた方が本望だろうし」

アイリスなら本を手荒く扱わないだろうし。紅茶も気に入ったようだしね。

「今日は遅いから、明日になったら案内するよ」

「ありがとう」

「そういえばどうして地図を広げているんだい？」

おそろくずつと気に入っていたんだろう、アルフレッドは興味深か気に問い掛ける。

測量技術が発達していないこの国ではあまり正確な地図は作られない。けれどアルベル家は軍事関連にはご執心しており、積極的に技術を取り入れているから世界でもトップレベルの技術を保有している。

「ああこれは、僕は分家する予定だから今の内からちょっと調べておこうと思ってね」

本当は他人に領内の地図を見せるのは感心される事ではないのだが、まあ、大丈夫だろう。

「どこを貰うんだ？」

「この辺りかな」

そう言って、アルバロン島近くを指差す。

「田舎だな。どうしてこんな所を？」

「この辺りは今まで人が足りなくて、放置されていたけど、結構土地が豊かだからね。この機会に魔獣を一掃して穀物地帯にしようと思って」

アルフレッドは納得が行ったという風に頷く。

「そうか……。この滞在が終わると暫く会う機会がなさそうだな」
「そうなるねえ」

それなら、とアルフレッドは不敵な笑みを浮かべ、さらさらな金色の髪をかき揚げる。

「チエス指さないか」

髪をかき揚げる必要はまったくないんだけどなとか思いながら、昨日の事を思い出す。

「昨日は見たことの無い戦術で負けたからな、逃げるなよ？」
「もちろん」

この人結構負けず嫌いなんだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929q/>

アイカシア王国記

2011年8月27日01時46分発行